論文11

呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為
―日本本州編―

●

菅　豊

動物考古学 第5号　1995.11

動物考古学研究会

呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為
―日本本州編―

●
菅　豊

はじめに

本稿では、一見何の変哲もない魚叩棒に実は儀礼的な道具としての意味が、そして、生業活動の中で、一見プラグマティックに繰り返されているかのごとくとらえられる魚叩行為に、儀礼的な所作が読み取れることを示し、その背景にあるサケをめぐる民俗的な再生世界を概観することが目的である。素材としてアイヌ、北西海岸インディアン(以後、北西海岸ネイティブと表記する)、日本の事例を中心として考察するが、前々号で既に、北海道において狩猟・採集・漁撈を中心に生計を営み、サケと密接に関わってきたアイヌの事例を取り扱った。また、前号ではカナダ北西海岸からアラスカにかけて居住し、狩猟・採集・漁撈を中心に生計を営み、サケと密接に関わってきた北西海岸ネイティブの事例を取り扱った。

アイヌにおいて魚叩棒は、儀礼複合体の中の呪具としてイナウと同一視され、その装飾に特有の形態が見られた。またその魚叩棒をめぐってあやなされる儀礼や口承文芸から、サケの魚叩行為がサケの霊魂の送り返し儀礼であることが明らかになった。それはサケの生と死の論理の上に成立しており、アイヌの観念的世界観を如実に示している。また、北西海岸ネイティブでは、魚叩棒に漁撈を支配し補助する“主”が形象され、サケの獲得時の力の源泉とされていた。サケの生と死の論理に関しては、魚叩棒、魚叩行為自体よりもむしろ、初サケ儀礼やそれを取り巻く口承文芸に濃厚に投影されており、アイヌと共通したサケをめぐる観念的世界を抽出することができた。

本号では魚叩棒に関する最終稿として、アイヌに南で接する日本本州の魚叩棒の事例を提供する。そして、日本本州において伝承されてきた、魚叩棒の形態・装飾・材質など物質面の特徴から、まず魚叩棒と魚叩行為の意味について検討し、次いでそこに込められている精神世界について、魚叩棒に付随した儀礼的な所作・伝承などの方面から、アイヌや北西海岸ネイティブとどのような関わりを持つのか、あるいは独自の地域的な展開が見られるのかという問題について考察していく。

1 日本本州の魚叩棒の実例

日本本州で魚叩棒と比定される考古遺物が存在することは、既に前々号で述べた（菅 1994：22）。それは岩手県森内遺跡から出土した「刻入丸頭付加工材」と呼ばれる全長426センチ、直径40ミリの木製品である。しかし、この木製品が確実に、サケなどの大型魚を撲殺するために使用された魚叩棒であったのか未だ証明されていない。本州で、魚叩棒と確定できる実例のうちもっとも古いものは、時代がずっと下った天保8年（1837）版行の『北越雪譜』に収載された以下の事例である。

事例1「魚楔（なつち）」 新潟県魚野川流域

「大鮭は三尺あまりあるもの丶鮟狂ふゆゑ魚楔といふものにて頭を一打うてば立地死す。こゝに奇なる事は、此魚楔といふもの馬の爪をきりたる楔にあらざれば死せず。私につくりたるつちにてはいくつ打ても升ず。又かれが頭に打べき所もありと漁夫がいへり。鮭ある所にてはいづくにても此なつちを用ふ、みな馬の爪きるつち也とぞ」（鈴木 1837：126）

このように、魚野川流域において、近世期末には既に「魚楔（なつち）」と呼ばれる魚叩棒が使用されていた。この棒の全長・直径・材質は不詳である。同書に掲載されている挿し絵を見ると、「魚楔（なつち）」は、打頭部の直径が握りに比べて大きく、打頭部を握り（グリップ）・柄部と明らかに分割し太く削り残してある型式で、日本では豆打ち用のヨコヅチに多く見られる

図1　事例1「魚楔の図」（鈴木　1837：127より転載）

形態（打頭部と柄部の境界が直角に近く、細くて長い）を持つ[1]。

この棒には、サケを叩き絶命させるという、その棒のもつ実際的、本来的な使用目的を完遂させることとそれほど関係があると思えないような、観念的な特徴が付与されている。それは『北越雪譜』の著者鈴木牧之にも「奇なる事」と評されるように、サケを殺すためにはウマの爪を切ったツチを用いなければならないという特徴である。勝手に作ったツチではサケを殺すことができず、またサケにも頭に打つべき場所があるという言説は、このツチ（魚叩棒）と、魚叩行為を特

殊化し、単なる漁撈道具、漁撈行為としてのプラクティカルな意味以上の観念的な意味が、魚叩棒・魚叩行為に存在していたことを示唆している。何ゆえウマの爪を切ったツチでないとサケを殺すことができないのか、はっきりとした理由を牧之は説明していないが、これは魚叩棒に儀礼的道具、魚叩行為に儀礼的行為の意味を見いだす作業の糸口になる。

前々号で筆者は、アイヌのサケの魚叩棒を分析し、それがサケの霊送りのための儀礼的な装置であることを述懐し、前号では北米北西海岸ネイティブにおいても、それが機能的な漁具としての意味だけではなく、呪具的な意味を付与されている様相を分析した。日本本州でも、事例1で紹介した「魚樸」だけではなく多くの魚叩棒に、儀礼的な伝承を見いだすことができる。

以下、実在の明確なものとともに、所在は確認できないが民族誌や報告書等に掲載された魚叩棒に関する、一般的な記述も含めて事例として提示する[2]。魚叩棒の名称は採集地の方名、引用した文献上の名称、博物館の資料台帳上の表記によった。

事例2「なえづち」 新潟県魚野川流域

新潟県魚野川流域において安斎忠雄によって確認されたもの。全長約280ミリ、直径31～33ミリ。材質はキリ。打頭部と握り・柄部との直径にほとんど差のない直棒型の魚叩棒であるが、握りの後端部にはわずかな削り込みが施され、そこに紐が巻き付けてある。安斎の報告によると漁場で水分を十分に含んでいるときこそこの棒の真価が発揮されるようで、乾燥するとバランス的に使いにくくなるという。(安斎 1987:1-2)

事例3「ナヅチ（魚槌）」 新潟県南魚沼郡大和町浦佐

「…はね狂う鮭をたたく道具。

自然木（主としてボイ）の長さ一尺二寸、直径一寸位の、そりのついた棒で、手許の方は縄をつけておく。縄の部分を口にくわえて両手で網を操り、必要の時すぐ手に持ちかえて使う。

北越雪譜にある馬の爪をきった槌を使うという事はない。砧形のものは力がはいらないので駄目である。ボイの切り口が馬の爪に似ているのでこれを言うのではないかという事であった。

「オーベスサマ、オーベスサマ」と唱えながら鮭の頭をたたいた。」(伊藤 1974:62)

事例4「ナヅチ」 新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田

新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田で筆者によって確認されたもの。小出町伊勢島新田において所有者魚沼漁業協同組合よって魚野川で製作、使用された。全長366ミリ、直径39～43ミリの直棒形の魚叩棒。全体的に緩やかな反りをもつ自然木を使用し、握りエンド後端から約54ミリが平らに削られている他、加工されていない。平坦部には紐を通す穴が穿ってある。この棒の材質はヤナギ類であるが、キリなども用いることがある。毎年漁の始めに作り直すが、豊漁の年に使用したものは縁起を担いでまた翌年使うという。逆に、不漁が続くときには、使っていたナヅチを折って川へ流し、新しく作り直す。この棒でサケを撲殺するときには、「オエビスサマ」あるいは「オービスサマ」と唱えながら叩くという。

写真1　新潟県小出町魚野川の魚叩行為（ナヅチ）

事例5「ナヅチ」 新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田

新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田で筆者によって確

認されたもの。小出町伊勢島新田において所有者魚沼漁業協同組合よって魚野川で製作、使用された。全長353ミリ、直径39～41ミリの直棒形の魚叩棒。握り後端部に偏って緩やかな反りをもつ自然木を使用し、握りエンド後端から約60ミリが平らに削られている他、加工されていない。平坦部には紐を通す穴が穿ってある。この棒の材質はヤナギ類であるが、キリなども用いることがある。棒の縁起担ぎや、「オエビスサマ」という唱えごとを行う点は事例4と同様である。

事例6「ナジリ棒」 新潟県五泉市三本木

「…ナジリ棒で「ホエバシ、ホエバシ」と声をかけナジリをかけてしとめる。」(伊藤 1982:35)

事例7「ノチ棒・ノジ棒」 新潟県荒川流域

「…イクリ漁で鮭がとれると、あばれないように頭を叩いて仮死状態にさせた。こうすると内臓が傷まない。頭を叩く棒をノチ棒といった（鳥屋）…鮭の頭をたたいて気絶させる棒をノジ棒といった（海老江）。」(赤羽 1991:153)

事例8「のでぼう」 新潟県三面川流域

新潟県三面川流域において安斎忠雄によって確認されたもの。全長約360ミリ、直径18～32ミリ。材質は不詳。握りを細めに削り、握り手が滑らないように握りエンドを後端部にはっきりと削り残している。打頭部が握りに比べて若干太く、連続しているバット型の魚叩棒である。安斎によると、三面川のイクリアミ漁[3]にこのような魚叩棒が使用されていたが、他に市販の角材を削ったきわめて簡単な魚叩棒も使われていたという。(安斎 1987:1-2)

事例9「タタキボウ」 新潟県三面川流域

三面川流域で収集されたもので磐舟文華博物館所蔵。全長410ミリ、直径30～32ミリ。打頭部と握りの差がほとんどない直棒型である。材質は不詳。表面が滑らかに整形され、打頭部には「万物輪廻　一殺多生」の文字が線刻されている。また、握り後端には釘で紐が固定され、その端には木製の魚形が取り付けられている。意匠的にかなり洗練された魚叩棒である。

事例10「タタキボウ」 新潟県村上市三面川流域

三面川流域で収集されたものでイヨボヤ会館（村上市内水面漁業資料館）所蔵。全長約410ミリ、直径32～45ミリで先太のバット型であるが、明確な握りエンドを有していないので、直棒型に比較的近い。表面が滑らかに整形されている。材質不詳。

事例11「タタキボウ」 新潟県村上市三面川流域

これも三面川流域で収集されたものでイヨボヤ会館（村上市内水面漁業資料館）所蔵。事例10より若干小ぶりで、全長約360ミリ、直径30～43ミリ。先太のバット型であるが、明確な握りエンドを有していないので、直棒型に比較的近い。表面が滑らかに整形されている。材質不詳。

事例12「ナウチカギ」 新潟県岩船郡山北町府屋

新潟県岩船郡山北町府屋（大川沿岸）において筆者によって確認されたもの。所有者本間幸五郎の家に古くから伝えられ、製作者、製作年代は不詳。1960年代まで使用されていた。柄部の先端には鉄鈎が付いていて、トアミでサケを漁獲した際、岸に引き上げるのにも使う。鈎の背面でサケの頭頂部を殴打し殺す。柄の全長255ミリ、直径33～34ミリ。鈎の大きさ縦65ミリ、横90ミリ。柄部の材質はスギ類。鈎部は鍛冶屋に作ってもらう。この魚叩棒でサケを殴打するときには、「オエビス、オエビス、オエビス」と、エビスの名を3回唱える。漁期が終わって使用しないときは、エビス様の神棚に供えておく。

事例13「ナウチボウ」 新潟県岩船郡山北町大谷沢

新潟県岩船郡山北町大谷沢（大川沿岸）において筆者によって確認されたもの。1984年、所有者本間清一によって製作、使用されている。全長408ミリ、握りの直径41ミリ、打頭部の直径63ミリ。握りを細めに削り、握り手が滑らないように握りエンドを後端部にはっきりと削り残している。打頭部が握りに比べて若干太く、輪郭が連続しているバット型の魚叩棒である。握りエンドには約500ミリほどの紐が結わえ付けてある。この魚叩棒は、コドと呼ばれる箱状の陥穽漁法に使用する。材質は流木（スギ類）で、川岸に生えているヤナギ類を使うこともある。この魚叩棒は御幣の形

写真2　新潟県山北町大川の魚叩行為（ナウチボウ）

に通常は作るものであるといわれ、使用しないときは事例12と同じくエビス様の神棚に供えておく。また、この魚叩棒でサケを殴打するときにも、「オエビス、オエビス、オエビス」と、エビスの名を3回唱える。

事例14「ナヅチ・エビス棒」　山形県最上川河口域

「…最上河口付近の鮭漁は、網に入った魚を求めて漁師がこれを陸に投げ上げる。一方で魚を待ち構えている者は、手に手にナヅチ、またはエビス棒と称する棍棒を持って「このエビス」とか「トウエビス」と唱えながら、一尾一尾の頭をたたいてその息の根を止めるといった手荒い所業であった。文字通りの撲殺である。このときに発したという「エビス」「トウエビス」とは、いつに何を意味した言葉であったのだろうか。」（野村 1979:295）

事例15「サケタタキボウ」　山形県東田川郡余目町槙島

1977年、山形県東田川郡余目町槙島において犬塚幹士によって収集されたもので（財）致道博物館所蔵。1955年頃に余目町槙島において旧所有者日下部敏雄によって製作、使用された。一本の材を削る通常の加工法とは異なり、握り・柄部と打頭部とを完全に分割加工しており、両者を組み合わせる構造物になっている。また、通常は木の側面が打頭部になるが、この魚叩棒の場合切断面が打頭部として使用された。全長502ミリ（握り・柄部412ミリ＋打頭部の直径90ミリ）、握り・柄部の直径38～39ミリ、打頭部の全幅250ミリ。材質は握り・柄部にはスギ類、打頭部にはキリを使用している。

事例16「こんぼう」　山形県日向川流域

山形県日向川流域において安斎忠雄によって確認されたもの。全長約350ミリ、直径30～37ミリ。材質はヤナギ類。握りの部分だけを皮を剝ぎ細めに削ってあるが、打頭部と握りの直径の差はバット型ほど大きくなく、また後端部に握りエンドを残していないことから、直棒型である。安斎によると、日向川のサケ漁では、川岸に自生するヤナギ類の太枝を適宜切って使用している。（安斎 1987:1-2）

事例17「ボウ」　山形県飽海郡遊佐町前谷地

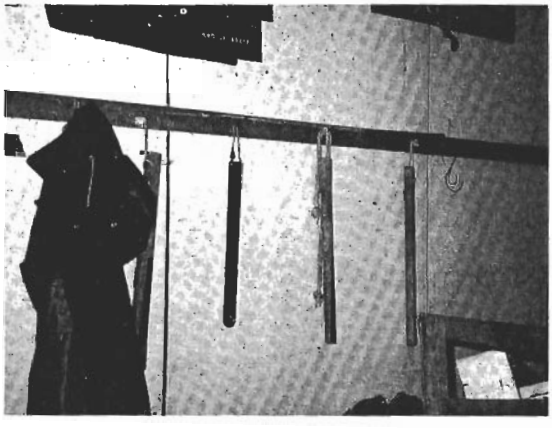
山形県飽海郡遊佐町前谷地において犬塚幹士によって収集されたもので（財）致道博物館所蔵。遊佐町前谷地において旧所有者前谷地漁業協同組合によって製作、使用された。全長458ミリ、長径40～45ミリ、短径30～34ミリ。材質は「ギシャの木[4]」。打頭部と握り・柄部との直径にほとんど差のない直棒型の魚叩棒である。両端に削痕が見られるが、全体に自然木の輪郭で、装飾、及び実用的な加工があまり施されていない。この地では必ずしも棒でなく、ツチなど他のものを使うこともあるという。

事例18「アンラクボウ」　山形県飽海郡遊佐町箕輪

山形県飽海郡遊佐町箕輪において筆者によって確認されたもの。箕輪は月光川の支流でサケ漁を行っている。所有者箕輪鮭生産組合によって製作、使用された。全長533ミリ。棒の断面が楕円形のため長径37～39ミリ、短径28～29ミリ。材質はナラ類。打頭部と握り・柄部との直径に、ほとんど差のない直棒型の魚叩棒である。表面はかなり滑らかに仕上げられている。握り後端から約30ミリのところに穴が穿ってあり、長さ31センチの紐が通してある。

事例19「アンラクボウ」　山形県飽海郡遊佐町箕輪

写真3　漁小屋の魚叩棒(アンラクボウ、山形県遊佐町箕輪鮭生産組合)



山形県飽海郡遊佐町箕輪において筆者によって確認されたもの。事例18と同じく所有者箕輪鮭生産組合によって製作、使用された。全長524ミリ。これも断面が楕円形になっている。打頭部先端の長径60ミリ、短径36ミリ、握り後端の長径42ミリ、短径31ミリと先太のバット型になっているが、明確な握りエンドを有していないので、直棒型に比較的近い。表面は滑らかに整形され、握り後端から約40ミリのところに紐穴が穿ってある。材質はナラ類。

事例20「アンラクボウ」　山形県飽海郡遊佐町箕輪

山形県飽海郡遊佐町箕輪において筆者によって確認されたもの。事例18、19と同じく所有者箕輪鮭生産組合によって製作、使用された。全長425ミリ、直径42～43ミリで打頭部と握り・柄部との直径に差のない直棒型の魚叩棒である。材質はナラ類。握り後端から約20ミリのところに紐穴が穿ってある。表面が滑らかに整形されているが、使用年数は事例18、19に比べて長そうで、先端部が磨耗のため丸みを帯びている。これは魚叩時に地面をこすってできた擦過痕であろう。

事例21「エビスボウ」　山形県最上郡大蔵村清水

山形県最上郡大蔵村清水において犬塚幹士によって収集されたもので（財）致道博物館所蔵。大蔵村清水において旧所有者小屋正一によって製作。全長397ミリ、直径約35～53ミリ。材質はスギ類。握りを細めに削り、握り手が滑らないように握りエンドを後端部にはっきりと削り残している。打頭部が握りに比べて太いバット型[5]の魚叩棒である。先端部10センチほどが反っていて、先端を打頭部とするため整形されている。モンペアミ漁[6]と呼ばれる漁法で使用される。なお本事例は、犬塚によって報告されているが、それによると「鮭漁の時、鮭の頭をたたいて殺す棒を「エビス棒」と呼んでいる。この時海岸の建網漁では「エビス」と声をかけてたたく」という（犬塚 1982:7)。

事例22「エベス」　山形県最上郡舟形町堀内

山形県最上郡舟形町堀内で収集されたもので舟形町歴史民俗資料館所蔵。舟形町堀内において旧所有者高山徳太郎により製作、使用された。全長350ミリ、直径30～44ミリ。中太のバット型で、明確な握りエンドを有している。打頭部は若干反っていて、下の方が表皮を剥がされて滑らかになっている。握りも樹皮が剥がされており滑らかであるが、中間部には樹皮が残っている。材質はヤマクワ。この棒でサケを撲殺するときには、「オエビス、オエビス」と唱えるという。

事例23「エビスボウ」　山形県最上郡舟形町舟形

山形県最上郡舟形町舟形で筆者によって確認されたもの。舟形町舟形において所有者伊藤幸好によって製作、使用された。全長390ミリ、直径33～35ミリで直棒型である。握り後端から55ミリのところに紐が結わえ付けられている。この棒の材質はスギ類だが、ヤナギ類など素材に限定はない。表皮が剥がされている程度で、全体的に加工は少ない。エビスボウはこのあたりでは誰でも作ることができ、壊れるまで使用する。1970年代まで小国川（最上川支流）では、漁の最盛期に河畔の漁小屋に寝泊まりしてサケ漁を行っていた。その漁小屋はスギやヤナギの曲木を組み藁を葺いたもので、中央屋根の部分にはエビスサマの神棚があり、漁の安寧と豊漁を願っていた。普通、その神棚には魚叩棒であるエビスボウを上げておいて、エビスサマのご神体とする。漁小屋の屋根に差すこともある。日頃は神酒を供え、イヲジル（サケで作った汁）を作るときにはイチノヒレ（胸鰭）をこの棒に供える。また漁期の最初にとれたハツイヲもそのイチノヒレはエビスボウに供えたあと、年長者が食べる。漁に出るときは、

神棚から棒をおろして腰に差して漁場に向かっていた。この棒でサケを撲殺するときには、「オエビス、オエビス」と唱えるという。

事例24「イオタタキ」　山形県最上郡鮭川村松沢

1981年、山形県最上郡鮭川村松沢において犬塚幹士によって収集されたもので(財)致道博物館所蔵。1955年頃に鮭川村松沢において旧所有者柿崎広勝によって製作、使用された。全長239ミリ（打頭部103ミリ、握り・柄部136ミリ）、打頭部の直径約60～58ミリ、握りの直径約27～28ミリ。材質はナラ類。打頭部の直径が握りに比べてかなり大きく、打頭部を握り・柄部と明らかに分けて太く削り残してあるハンマー型である。藁打ち用のヨコヅチに多く見られる形態を持っており、その点において事例1で紹介した近世末に新潟県魚野川流域で見られた魚叩棒と酷似する。

事例25「タタキボウ」　山形県最上郡鮭川村川口

山形県最上郡鮭川村川口で筆者によって確認されたもの。鮭川村川口において所有者矢口耕太郎によって鮭川（最上川支流）で製作、使用された。全長495ミリ、直径33～55ミリ。先太のバット型であるが、握りエンドは残していない。自然の曲木を使用しているようで、打頭部が大きく反っているが、加工はほとんど為されていない。材質不詳。

事例26「タタキボウ」　山形県最上郡真室川町高沢

山形県最上郡真室川町高沢で筆者によって確認されたもの。真室川町高沢において所有者高橋貴一郎によって真室川（最上川支流）で製作、使用された。全長465ミリ、直径29～39ミリ。バット型ととらえられる。握りエンドはない。この棒の特徴的なのは、後端約140ミリのところから反り始めており、反りが全体の後端部、すなわち握り部に偏っている点である。全体に表皮が剝がされ白木になっていて、特に握りは滑らかに整形してある。材質はスギ類。

事例27「名称不詳」　秋田県仙北郡上檜木内村（現西木村）

「…漁夫が魚を獲つた時の歓声や、魚を叩き殺す時の呪言に「エビス！」と叫ぶことは何処でもやるらしい」（武藤 1940:6）

事例28「名称不詳」　秋田県仙北郡田沢村（現田沢湖町）

「…エビス！　魚を獲つた時の懸声であるが、一尾一尾の場合よりも寧ろ沢山獲れた時にかう叫ぶ。」（武藤 1940:148）

事例29「名称不詳」　秋田県仙北郡雲沢村碇（現角館町）

「…昭和十二年六月八日、碇部落へ行つたら、このユグリ（イグリ網のこと：引用者注）をやつてゐた。みてゐるうち一貫匁以上の大鱒二尾を獲つたが、「エビス！エビス！」と叫び乍ら、その頭を叩いて殺した。」（武藤 1940:176）

事例30「名称不詳」　秋田県仙北郡雲沢村下延（現角館町）

「…鱒や鮭を獲つて叩き殺ろす時には「エビス！」と叫ぶ。大漁を予期し、或は自慢して行く人は「今日は良い恵比寿が授かるぞ」と言つて行く。魚以外の物でも、あまり良い物が出たりすると思はず「このエビス！」と叫ぶ。」（武藤 1940:193）

事例31「名称不詳」　秋田県仙北郡花館村（現大曲市）

「…鮭や鱒は捕れると直に撲殺するものであるが、之を打殺す時には「エビスッ」と云ふ掛声をする風習がある。秋田県では一般に恵比寿社の川の畔、殊に鮭などの獲れる川の岸に在るものが多い。」（田口 1916:25）

事例32「アバ」　秋田県仙北郡花館村（現大曲市）

「…鮭を叩き殺す時の唱事秘事次の通り

今日の初鮭（ハツヨ）一万五千本　此のハナ大恵比寿大恵比寿

と二回唱へて、アバ[7]で叩き殺ろす。」（武藤 1940:215）

事例33「アバ」　秋田県河辺郡豊岩村（現秋田市）

「…鮭を押へると、網のアバ（浮木）でその鼻柱を「このエビス！」と叫び乍ら叩き殺す。

又、「トウ恵比寿（エベシ！）」それから又「トウ西の宮大神宮！」と唱へてから殺す向きもある。雲寝河原の辺だと（ママ）「ゴド、サヌギさで置いで、俺や網を来て呉だが」即ち下流の漁場では獲られないで、この俺に獲へられたいと思つて来て呉たかと、自分勝手にきめて

感謝し乍ら殺ろす。」(武藤 1940:254)

事例34「恵比須槌」 青森県三戸郡湊村（現八戸市）

「…陸奥三戸郡湊村の大祐明神は工藤祐経の子犬房丸大祐を祭ると云ふ説である。昔大祐此地に来り寓するや、従者の又次郎長才の兄弟あり、漁を以て其主を養う。二人共に頗る漁に巧にして、或時は新井田川に於て兄は鮭千本弟は八百本を漁したことがある。仍て今も漁夫鮭を得るときは、恵比須槌を以て其魚の頭を打ち、「千魚又次郎八百長才(せんこまたじろはっぴゃくちょうさい)」の九字を唱へ、大漁を希ふ神呪とするとある。鮭を秋祭の供御にする例は多い。」(山崎(柳田) 1916:27) なお、同様の報告が川合勇太郎によってもなされている (川合 1970：166-167)

事例35「ゲンコ」 岩手県宮古市津軽石

岩手県宮古市津軽石で筆者によって確認されたもの。宮古市津軽石において所有者津軽石サケ繁殖保護組合よって津軽石川で製作、使用された。全長482ミリ、直径24～48ミリのバット型の魚叩棒。握りエンドも約40ミリ残してある。材質はスギ類。

事例36「タタキボウ・センボウ」 岩手県気仙川流域

「…船にあげた鮭を直ちに棒で鼻を叩いて殺している。この棒は「キフジ」などを用いて二尺程の長さにし、上部を太く握る部分を細くした型で「タタキボウ」と呼んでいるが、鮭を千本獲るようにと「センボウ」とも称している。」(小野寺 1994:77)

事例37「センボンキネ・ヘンゴツツ・タタキボウ」 岩手県・宮城県北上川流域

「…北上川では「センボンキネ」、「ヘンゴツツ」、「タタキボウ」などの呼称があり、材料も桜、柳、杉などと一定しておらず、形状も様々であるが長さはおおよそ一尺五寸前後である。」(小野寺 1992:35)

事例38「ヘンゴヅツ・ノジボウ」 岩手県・宮城県北上川流域

「…網にかゝった鮭を取ると素早く棒で鮭の頭を叩いて殺した。味を美味に保つためであるといわれ、鹿又辺りではこの棒を「ヘンコヅツ」と呼んでいるが、岩手県の日形地方では「ノジボウ」と称している。」(小野寺 1983:85)

事例39「ウオコロシ」 茨城県東茨城郡常北町上泉表坪

茨城県東茨城郡常北町上泉表坪で筆者によって確認されたもの。所有者浅野徳寿によって製作、使用された。全長361ミリ、直径32～48ミリで丸みを帯びたバット型であるが、明確な握りエンドを有していない。表面は滑らかに整形され、握り後端から約20ミリのところに紐穴が穿ってある。先端部はかなり磨耗している。材質はカシ類。

事例40「不詳」 千葉県、茨城県利根川流域

安政期（1854～1860）の東関東の風物を記した『利根川図誌』に赤松宗旦が報告した事例。全長・直径・材質は不詳。『利根川図誌』では「鮭魚大網の図」に、サケの魚叩行為が描かれ、それに付された説明には「手に棒を持ち網子かゝりたるさけの頭を打つ」とあるのみである。描かれた魚叩棒の形態は、絵図上からは窺いしれない。ただし、事例1で紹介した『北越雪譜』とともに、近世期の魚叩棒の存在を知る上で貴重な資料である。(赤松 1855[8]:66-67)

事例41「スリコギ」 茨城県北相馬郡利根町押付新田

「シャケはとったら頭をスリコギでぶったたいて気絶させる。でないと、船からバタンバタンと逃げ出しちゃう。頭といっても目玉の上やその後ろの方じゃ死なない。鼻っかしらをスリコギでぶったたくのだ。」(芦

写真4 漁小屋の魚叩棒(ゲンコ、岩手県宮古市津軽石サケ繁殖保護組合)

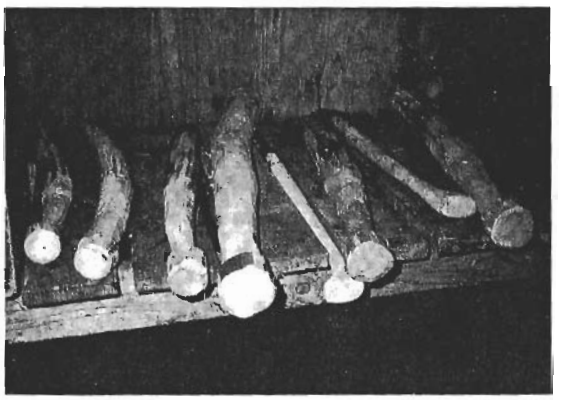


写真5　茨城県常北町郡珂川の魚叩行為（ウオコロシ）

原 1984:237)

2| 日本本州の魚叩棒の特徴

以上、日本本州で使用された（されている）魚叩棒の事例を提示した。このような魚叩棒、あるいは魚叩行為自体はそれほど珍しいものではなく、サケ漁が行われている河川では普遍的に見られるといってもよい。ただし、その漁具についての報告は、明らかに東北、あるいは中部地方の日本海側に偏っている。これは、それらの地域においてサケ漁が盛んであるという状況とともに、それらの地域の魚叩棒が民俗学的に注目される伝承を特に保持していた状況と無縁ではない。引き続いて魚叩棒の特徴について細かく見てみよう。

(1) 本州の魚叩棒の大きさ

提示した41例中、全長が明らかなものは26例、直径が明らかなものが24例と全体の6割程度である。全長の最小値は255ミリ、最大値は533ミリと数値に幅があるが、平均は約407ミリで、多くの棒がこの値とかけ離れた値を示さず、地域別、河川別の大きさの偏差は小さい。平均値はアイヌの魚叩棒約380ミリ、北西海岸ネイティブの魚叩棒約403ミリより若干大きい程度である。直径は、最大値と最小値まで明らかな事例が23例あるが、それらの最大値平均は約44ミリ、最小値平均は約33ミリである。

(2) 本州の魚叩棒の形態

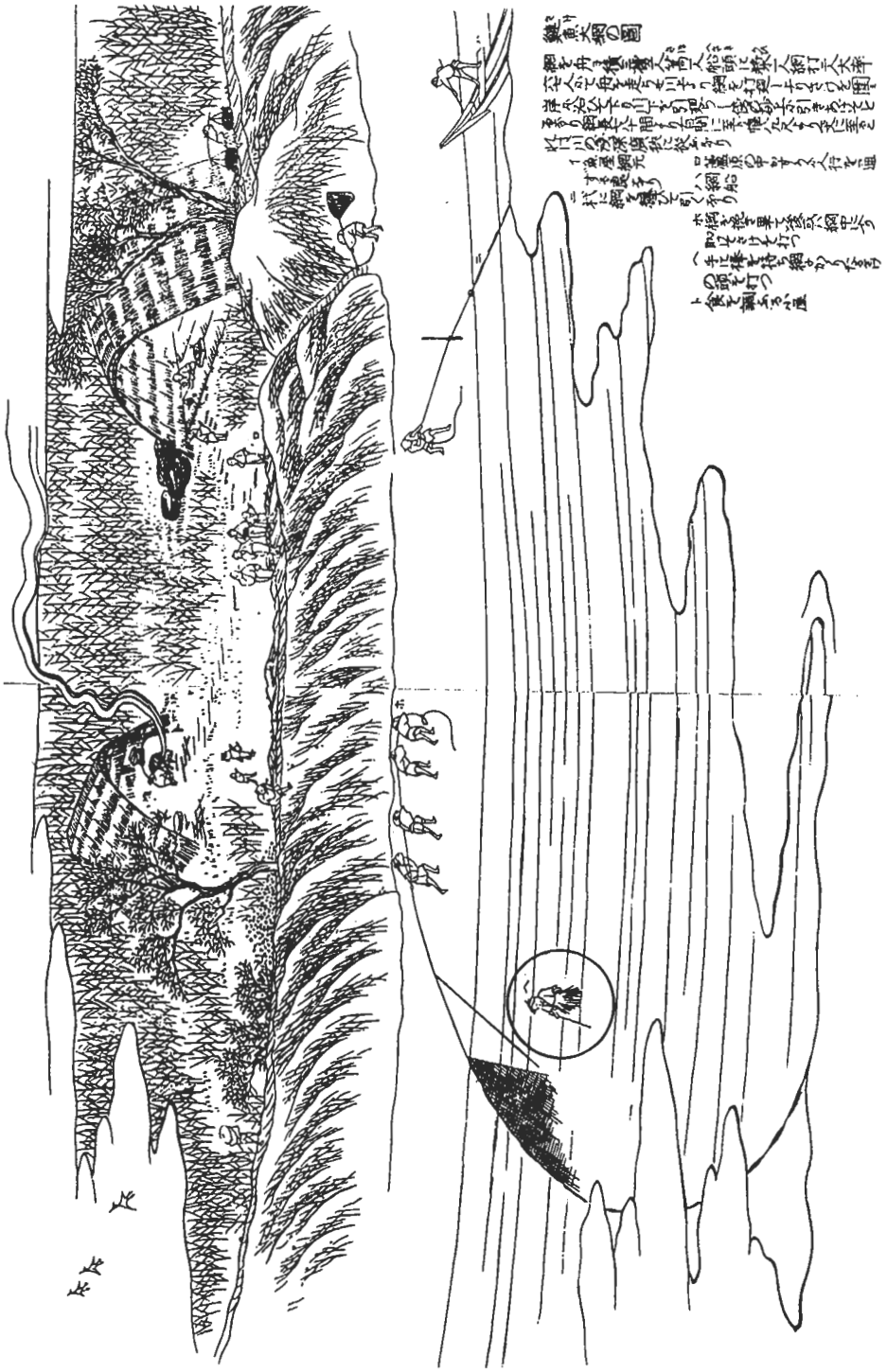
41例中形態のわかっているものは25例である。その内訳は、打頭部と握りの太さにあまり差のない直棒型が11例、そして打頭部と握りの太さに差があって全体のシルエット（輪郭）が連続しているバット型が同じく11例、打頭部と握りの太さに差があり、明らかに打頭部と握りを分けてシルエットが非連続なハンマー型が3例である。アイヌでは直棒型が圧倒的に多く、北西海岸ネイティブには逆に、直棒型がなくバット型や、ハンマー型、複雑なシルエットをもつ形式が多かったが、本州の魚叩棒には、直棒型とバット型が半々の割合で出現している。ハンマー型は明らかに少ない。

ハンマー型は事例1、15、24の3例で、その内事例1、24が非常によく似たシルエットをもつ。打頭部の直径が握りに比べてかなり大きく、打頭部を握り・柄部と明らかに分けて太く削り残してあるハンマー型で、打頭部と柄部の境界が直角に近いヨコヅチに多く見られる形態を持っており非常に珍しい。

さらに希少な事例15は、1本の材を削る通常の加工法とは異なり、握り・柄部と打頭部とを完全に分割加工したハンマー型である。これは握り・柄部と打頭部の両者を組み合わせる構造物になっていて、外見上、まさにゲンノウ状の木ヅチである。大多数の魚叩棒が、木の側面を打頭部としているが、この魚叩棒の場合、切断面を打頭部としている点に特徴がある。類例面、機能面からみて、この形式の魚叩棒が純粋に魚叩棒として製作されたかどうかは疑しい。

直棒型11例中2例(事例4、5)、バット型11例中5例(事例13、21、22、25、26)、形態不詳の事例3など、全体の3分の1ほどの魚叩棒に反りが入っている。そのカーブは、事例4、5、25、26のように自然の曲木を用いた例もあれば、事例21、22のように人為的に削って加工した例もある[9]。アイヌ及び北西海岸ネイティブの魚叩棒には、この反った形式はほとんど見受けられず、

図2　「鮭魚大網の図」（◯内は「手に棒を持ち網子かゝりたるさけの頭を打つ」場面、赤松　1855：66-37より転載）



本州の魚叩棒の形態的な特色のひとつといえる。

表皮を剝ぎ取るなどの整形については、事例18、19、20、23、26など全体が整形されたものもあれば、事例4、5のように握りのみが、また事例22のように打頭部だけが整形されたりと様々である。事例17のように自然木で、全く整形されず使用されている例もある。

(3) 本州の魚叩棒の材質

本州の魚叩棒では使用される材質に明確な限定はなさそうで、もっとも多く使用されているのがスギ類(事例12、13、21、23、26、35の6例[10])、次いでナラ類(事例18、19、20、24の4例)である。アイヌにおいて圧倒的に多く使用され、材質規定されていたヤナギ類も3例(事例4、5、16[11])見られるが、これを含めてはっきりとした材質規定、禁忌は、本州の事例では見いだせない。

(4) 本州の魚叩棒の装飾

アイヌの魚叩棒には、その多くに叩くという実用的な機能にはほとんど寄与しない装飾－削りかけ－が施されていた。また、北西海岸ネイティブではその北方に居住するTlingit族、Haida族、Tsimshian族、そしてKwakiutl族の一部などで、トドやクジラ、シャチ、アザラシなどの動物図像が、魚叩棒の上に彫刻されていた。両者とも、それぞれのサケをめぐる観念的世界の中で理解できる意匠である。ところが、日本本州の魚叩棒には、そのような装飾、観念的な世界を投影する意匠などは、ほとんど施されていない。そういった中で事例9、新潟県三面川流域で使用されたタタキボウと呼ばれる魚叩棒に、「万物輪廻　一殺多生」の8文字が刻まれていることは興味深い。

これはもちろん仏教用語であり、先の「万物輪廻(ばんぶつりんね)」の4文字は「すべての生あるものは生死を繰り返す」という意であり、後の「一殺多生(いっせつたしょう)」4文字は「1つを殺生することも、それで多くを生かすことができるのならば功徳になる」という意である。つまり、前者ではサケ漁、そしてその中で必ず行われる魚叩行為によって殺されるサケが再び生き返ることを暗示し、また後者では魚叩行為というサケの殺生の合理性を表明している。非常に仏教的な説明ではあるが、この魚叩行為を特別な感覚で受け止め、それを表現したものとしてこの線刻は重要である。もちろんこのような表現法をとる類例が他に見あたらない点、また、握り後端に木製の魚形の付いた紐が固定されているなど意匠的にかなり洗練された魚叩棒である点から見て、この棒が、特別な知識、教養－たとえば仏教に関する知識－を持ち、実生活としてサケ漁に携わっていなかったものによって製作された可能性もある。しかし、この棒に込められた感覚、すなわちサケの再生観とサケの殺生観は、この製作者1人によってのみ保持されたものではないようである。

事例18、19、20の「アンラクボウ」を使用する山形県遊佐町箕輪では、サケを殺すいわゆる殺生という感覚を合理化するために、やはり「一殺多生」の言葉で説明する。その言説は、棒に彫り込まれこそしないが、サケ漁に従事するもの達から異口同音に語られる言葉である。このような解釈法が、いかにして形成されたか魚叩棒の分析からは確たることはいえない。ただし、この地域がサケ供養の卓越した地域であることからして、仏教の教えをサケ漁師たちの中に広めた宗教者の姿が想像される[12]。

また、事例13、新潟県岩船郡山北町大谷沢で確認されたナウチボウは、何の変哲もないバット型の魚叩棒で特別な意匠は施されていないが、通常、この地域の魚叩棒が「御幣の形」に作るものであるといわれている点は重要である。実際に装飾することはなくとも、「御幣の形」に作るという言説は、この棒が何らかの儀礼的な道具としての意味を持っていることを暗示しているのである。それ故、この棒は使用しない時には、エビス様の神棚に供えられるのである。

いずれにしても、本州の魚叩棒の装飾面からは、その棒の観念的な装置としての役割を見いだすことは困難である。しかし、本州にみられる魚叩棒の観念的な装置としての役割が完全に否定されるわけではない。それは、本州の魚叩棒に付せられた名称、あるいはそれを使用する時に伴う呪言など棒にまつわる伝承から

写真6　山形県庄内地方のサケ供養塔1（(財) 致道博物館所蔵）

写真7　山形県庄内地方のサケ供養塔2（(財) 致道博物館所蔵）

見いだすことができるのである。

3| 日本本州の魚叩棒の観念的な機能

山形県最上川中下流域からは「エベス（事例22)」、「エビスボウ（事例14、21、23)」、青森県八戸市からは「恵比須槌（事例34)」というエビス神の名が付されている魚叩棒の事例が報告されている。その内事例23の「エビスボウ」はエビス神の形代でもあった。

先に述べたように、1970年代まで小国川（最上川支流）では、漁の最盛期に河畔の漁小屋に寝泊まりしてサケ漁を行っていた。その漁小屋は曲木を組み藁を葺いたもので、屋根中央の部分にはエビスサマの神棚があり、漁の安寧と豊漁を願った。普通その神棚には魚叩棒である「エビスボウ」を上げておいて、エビスサマのご神体としたのである。漁小屋の屋根に差すこともあったという。日頃は神酒を供え、イヲジル（サケで作った汁）を作るときにはイチノヒレ（胸鰭）をこの棒に供えた。また漁期の最初にとれたハツイヲもそのイチノヒレはまずエビスボウに供えた。漁に出る時には、神棚から棒をおろして腰に差して漁場に向かった。

エビス神の名称を魚叩棒に付けるということ以上に、それ自体をエビス神の神体とし、漁の結果を左右する神として信仰しているのである。サケの頭を叩く漁具である魚叩棒が、まさに儀礼・信仰の道具として扱われているのである。先に新潟県山北町の事例に、魚叩棒は「御幣の形」に作ってエビス神に供えるという言説が付随することを紹介したが、これもまた、魚叩棒がエビス神と密接に関わる儀礼的な道具であることの証左である。

さらに注目しなければならないのは、「エベス」「エビスボウ」とエビス神の名が付けられている棒に限らず、多くの魚叩棒にその使用時にエビス神の名を唱えるという行為が付随している点である。「オーベスサマ」「オ

エビスサマ」「ホエバシ」「エビス」などエビスの名を連呼する例（事例3、4、5、6、12、13、21、22、23、27、28、29、30、31）、「この」とか「トウ」などという接頭辞をエビス神の名の前に付ける例（事例14、33）、また、エビス神の名を呼び替えて「トウ西の宮大神宮」と唱える例（事例33）、さらに丁寧に「今日の初鮭（ハツヨ）一万五千本　此のハナ大恵比寿大恵比寿」と長い文言を唱える例（事例32）すらある。事例34の「恵比須槌」を用いる青森県八戸市などでは、「千魚又次郎八百長才（せんこまたじろはっぴゃくちょうさい）」の九字を唱へ、大漁を祈願する神呪としており、エビス神の名こそ登場しないものの、魚叩行為にはやはり呪言が付随しているのである[13]。

この魚叩時の呪言については、アイヌにおいても同様になされていた。呪言は「イナウコル、イナウコル（inau-kor、inau-kor）」というもので「イナウをお持ち、イナウをお持ち」という意味を持つ。それはアイヌにおいて魚叩棒イサパキクニ（i-sapa-kik-ni、それの頭を叩く木）が、サケの肉をこの世にもたらす代償に神に贈られるイナウであり、さらにそれはサケの霊魂を送り返す儀礼的な装置としても機能する、つまり魚叩行為がサケの霊魂の送り返し儀礼であることの証左ととらえられる（菅 1994：21-42）。

果たして日本本州の事例にも、アイヌのような観念的意味を見いだすことは可能であろうか。その意味を、もっとも構造的な伝承の残存する事例13で考えてみよう。

事例13が採集された新潟県山北町大川流域では、そのサケ漁撈を語るにあたって「サケは各家のエビスサマの神棚に供えられるために遡ってくる」と言い伝えている。もちろん、サケ漁従事者はサケの生態について熟知しており、生物学的にサケは産卵のために川を遡上することも当然理解しているものの、サケ漁を行う上でなおかつ「サケは各家のエビスサマの神棚に供えられるために遡ってくる」と語るのである。この言説は、漁撈活動の中に見られる儀礼的な所作を説明し、補強するものとなっている。

大川では、コドと呼ばれる箱状の陥穽漁具にサケを誘引して捕獲する。この漁具の中心には、エビスグイと呼ばれるひときわ長い杭が打ち込まれる。これを打つことによってコド内部に適度な水の流れができ、それに乗ってサケがコドに入ってくると言われる。コドの集魚性能を左右する構造上の中枢であるこの杭に「エビス」の名を冠していることは、この杭が信仰上も何らかの意味を付与されていることを示唆している。

コドの製作が完了し、いつでも漁が行えるようになると、コドハジメといって漁の口あけを祝う。このときエビスグイにはエビスサマの神札を紅白の水引でしっかりと結わえ付け、これに餅と神酒を供える。さらに、サケの遡上を願って別のエビスサマの神札を川に流す。エビスグイの神札は漁期の間取り付けておき、漁の終了を祝うカギアライの時にはずして川に流す。

サケの化け物が遡ってくるとされる12月15日のオースケコースケの日には、エビスグイにカラコモチという餅を供えて「オースケコースケ上れや下れ」と呪言を唱える。サケ漁に死穢は縁起のよいものとして

写真8　エビスグイの打ち込み

写真9　エビスグイにエビスサマの神札を巻く

考えられており、例えば棺桶を担いだ棒をエビスグイにしたりする。

また、漁獲時に実際には2～2.5メートルのカギでサケをかき捕るが、そのカギにもエビスグイと同じくコドハジメにエビスサマの神札を巻き付ける。先にも述べたように、サケは「各家のエビスサマの神棚に供えられるために遡ってくる」といわれており、それゆえ自分の家のエビスサマに供えられるために遡ってきたサケは、コドの奥のかき捕りにくいところにいても確実に捕ることができるとされる。逆にすぐ目の前にいてかき捕りやすいようにじっとしているサケでも、他の家のエビスサマに供えられるために遡ってきたサケは、どうやってもカギの動きをかいくぐって逃げてしまうと語られる。このことから、サケにはそれぞれの目指す家の「ゲタジルシ」(家印)が付いている、という表現がなされるほどである。ちなみに、事例33秋田県河辺郡豊岩村（現秋田市）では、魚叩時に「トウ恵比寿（エベシ！)」、「トウ西の宮大神宮！」の呪言が唱えられ、そこでは「ゴド、サヌギさで置いで、俺や網を来て呉だが（下流の漁場では捕らえられないで、この俺に捕らえられたいと思つて来てくれたか)」と、サ

写真10　完成したコド

写真11　エビス神の呪言のもとに行われる魚叩行為

ケの遡上に関して解釈している(武藤 1940:254)。山北町で語られるサケの遡上の説明体系と共通した感覚がここに反映されているのであり、このような解釈法は決して山北町に特殊なものではない。

かき捕られたサケは、ナウチボウで「オエビス、オエビス、オエビス」の呪言のもとに撲殺される。この棒は「御幣の形」に作るものとされ、使用しないときはエビスサマの神棚に供えることは既に述べたとおりである。

写真12　コド小屋のエビスサマの神棚 1

写真13　コド小屋のエビスサマの神棚 2

写真14　コド小屋のエビスサマの神棚 3

写真15　コド小屋のエビスサマの神棚 4

サケは漁獲後、川岸にあるコド小屋に運ばれる。そこには奥にエビスサマの神棚が設えられ、エビスサマの神札、御幣、神酒、サカキなどが供えられている。サケはこの神棚の下に必ず供えられる。その時、まな板の上に載せ、神棚に腹を、頭を右にして供える。エビスサマの神棚はコドハジメの時に作られる。コド小屋が用いられる以前は、曲木と藁で作ったアンジャ小屋という簡易の小屋を用いていたが、これには梁を支

写真16　家のエビスサマの神棚

写真17　家のエビスサマの神棚に供えられたサケ

えるためのエビスグイという構造的に中心となる杭があった。これにもコドのエビスグイと同じくエビスサマの神札が巻かれ、捕れたサケはこの杭に供えられていた。

サケはコド小屋、アンジャ小屋より家へ運ばれ、家のエビスサマの神棚に供えられる。サケはエビスサマに必ず供えた後で食べるものであるとされており、それ以前に調理することはほとんどない。

以上のように、山北町大川流域のサケの漁撈活動にはエビス神を中心とした儀礼的な要素が多く織り込まれている。エビス神が「幸」をもたらすという伝承は日本各地において人口に膾炙しているが、大川流域でもエビス神はサケという食料をもたらす福神である。このようなエビス神がサケ漁においてどのように機能しているのであろうか。サケ漁におけるエビス神の登場場面を整理してみると次のようになる。

まず漁の口あけ儀礼コドハジメには、エビス神の神札を川に流したり、コドのエビスグイ、カギ等の漁具に付け、コド小屋にはエビス様の神棚を付設する。サケはエビス神の神札の流された川をつたって遡上し、エビス神の神札の付いたコドに入る。ここでエビス神の神札の巻いてあるカギによってかき捕る。そしてコドの外に出したサケを、ナウチボウという魚叩棒によってエビスの呪言のもとに叩き殺す。次いでコド小屋に運びエビス神に供える。最後に家に運びエビス神に供えて、この段階が終わらぬ内に人々はそのサケを調理してはならない。

漁撈活動、及びその前後の様々な場面における、この入念なエビス神とサケの関わりは、大川流域の人々によって「サケは各家のエビスサマの神棚に供えられるために遡ってくる」という伝承によって直接的に理解されている。

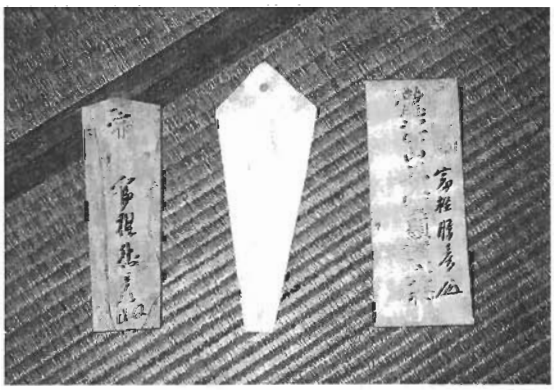
遥か遠くの海より、各家のエビスサマを目指してやってくるサケに対し、川に流されたりエビスグイ、カギに巻かれたエビスサマの神札は目印のような役割を担っているとされる。つまり、海の彼方の別世界にいるサケは、自分の供えられるべきエビスサマの存在する場所を川を流れてきた神札によって知り、川では様々なコドやカギを見かけるが、神札によって自分の目指すエビスサマのコドを判別できる。そして、そこでサケは命を絶たれるが、「亡骸」は人間が少しずつエビスサマに導いてくれ、最終的に家のエビスサマの神棚に供えられると考えられているのである。

このように大川流域の人々は、「サケは各家のエビスサマの神棚に供えられるために遡ってくる」という言説と、サケを捕る人々が漁撈活動の中で行う儀礼的要

写真18　エビスサマの神札1

写真19　エビスサマの神札2（表）

写真20　エビスサマの神札2（裏）



素を連関させることによって、エビス神、人間、サケの3者の関係性を描出しているのである。ここではサケとエビス神の交渉の仲立ちとして人間を位置づけていることが確認できる。つまり、サケをエビス神へ導き、その関係性を仲介することが人間の役割、あるいは漁撈活動の役割としてとらえられているのである。エビス神に供えられたいというサケの願望を叶えることと、漁撈活動とは全く合致することであり、サケの願望を叶えた段階で、ようやく人々の糧としてサケは利用される。

サケがエビス神のもとへ到達することを手助けするという説明体系を基盤として、人々の漁撈活動は展開されているのであり、それは、ただサケを食料として獲得するための単なる経済的な活動としてのみとらえられるものではなく、その活動を背後から裏打ちする神事的な重要性をも担っていると考えるべきであろう。

また、我々は漁撈を行う必然性、あるいは正当性を与える説明体系を形成させた背後に、サケを人間の力だけでは獲得できないという感覚が隠されている点に注目すべきである。つまり、サケを人間が食料として利用するためには、自分（人間）の力だけでは乗り越えられない大きな観念的な障壁が存在し、エビス神という超自然的な存在を導入することによってこれが初めて乗り越えられるとする感覚である。その感覚は、サケの寄魚としての出現形態と無縁ではなかろう。

エビス神との接触以前、サケは人知の及ばない遠い海の彼方に存在し、それが毎年決まって秋になると大群をなして自分たちの村へと出現する。すなわち、人々の持つ世界観ではサケが異界に属するものとして認識されているのであって、この別世界から来訪する生き物はエビス神と接触を繰り返し、最終的に身近な自分（人間）の世界＝此界の価値体系に取り込まれている。結局、このエビス神との接触過程は、サケを異界より此界へ導き入れるために、サケの異界性を払拭し、此界での意味づけを行う儀礼ということになろう。最後のエビス神への供え以前の食用禁忌は、そのような心意の現れである。異界からの来訪者であるサケに対し、

特別の念を抱きそれを自分の世界に迎え入れるために属性を転換させていると考えられる。このサケの属性転換の重要な節目の1つとなっているのが、エビスの名のもとに行われる魚叩行為である。

吉田禎吾は、エビス神が「〈この世〉と〈あの世〉、〈内〉と〈外〉、〈こちら〉と〈かなた〉、〈人間の世界〉と〈神々の世界〉との橋渡しをする〈媒介者〉〈媒介物〉」の性格を有することを指摘し(吉田 1977：410)、また、この論を受けて波平恵美子もエビス神が「境界性・両義性」(liminality) と深い関わりを持つことを明示している(波平 1978：353)。波平が整理するように、エビス神は (1) 海と陸、他界と此界との境界、つまり空間上の境界にあり、(2) 1つの集団から他の集団へとその所属を移している存在であり、(3) 状況と状況との境界にある存在 (波平 1978：353) であって、そのような性格は、寄魚としてのサケの漁撈からも読み解くことができるのである。

漁期中のサケの獲得、利用が円滑に行われるために、漁の口あけであるコドハジメに漁具、漁場にエビス神の神札を取り付け、「川」はエビス神の座す空間と化す。また、エビス神の神札は最終的に漁期の終了を祝うカギアライに取り外され、それによって「川」よりエビス神は消え去る。コドハジメはエビス神の導入、カギアライはその解除であって、これはエビス神の去来という形をとる。

大川流域の人々にとってサケの漁撈は、人間、エビス神、サケの3者の関係の中に表出する論理のもとに展開される。そこにおいて、人間はサケ－エビス神の関係を取り持つような形で表現されるが、実際はエビス神が人間－サケの関係を取り持つ媒介者として機能していた。エビス神は、サケという未知なる世界より寄り来る神秘的な動物を、この世のものとして人々の認識体系に取り込むための文化装置であり、マテリアルな漁具に勝るとも劣らぬ実用性を持った「漁具」である。また、別の言い方をすれば、サケ漁は、サケを異界より移行させるための儀礼で、各漁具はその儀礼に使われる呪具である。特に、サケの魚叩行為は、サケの肉を此界へもたらす死の儀礼であるといえよう。

以上、新潟県山北町大川流域の事例をもとに、人間－エビス神－サケをめぐる観念的な世界を読み解いたが、他の地域の事例も同様の構図で把握することができる。特に、事例23の「エビスボウ」などでは、魚叩棒がエビス神の形代とされており、漁具自体が直接信仰の対象になっている。他の魚叩棒・魚叩行為の事例には、山北町の事例のような構造的な言説を付随するものは少ないが、共通してエビス神を魚叩時に導入する心意は、寄魚たるサケをもたらす神としてのエビス神の機能に期待したものであると考えられよう。それらはサケの住む異界と、人間の住む此界という2分法的な世界観から理解することが可能である。このような世界観は、異界と此界の交流を描いた「サケの大助譚」などの口承文芸にも、同様に投影されているのである[14](菅 1990：125-146)。

4 総括

さて、3号にわたってアイヌ、北西海岸ネイティブ、日本本州の魚叩棒・魚叩行為の儀礼性について論述してきた。最後に、それらから読みとれた観念的な機能、サケをめぐる超自然的な存在、世界観を総括する。

まず、アイヌであるが、アイヌにおいては魚叩棒はアイヌのもつ大きな儀礼体系に組み込まれ、その中で儀礼的な道具として重要視されるイナウと付会して扱われていた。①材質制限(ヤナギやミズキに限定)、②装飾 (削りかけ)、③呪言 (「イナウコル、イナウコル」)、④取り扱いの規定(漁期ごとに更新し、幣場に供える)、⑤使用者制限(「サパシタイキアイヌ、イサパタアイヌ」) などは、魚叩行為の儀礼性を特徴づけるものである。サケをめぐる神話には、魚叩棒に関するタブーが説明されている。それには、サケは、大きな力を有するカムイ (kamuy、神) の支配のもとにあり、その遡上はカムイの意のままに制御されているとされ、規定通りの魚叩棒を使用しない場合サケの遡上を差し止めることもある。カムイの世界と人間の世界をサケは交流し、カムイに対する贈り物としての魚叩棒を届け

る使者として、撲殺したサケが位置づけられている。これはサケの霊魂をカムイの世界へと送り返す儀礼を説明したものである。それは、魚叩棒で殺されるが故に、再び生き返って人間の世界へ訪問することができるとするサケの死と再生を直接的に語る神話も存在していることからも明らかである。これは、初サケ儀礼の論理と軌を一にするものである。

次に北西海岸ネイティブであるが、北西海岸ネイティブにおいて、直接魚叩棒からは、アイヌほどの厳密細緻な儀礼性は抽出しにくい。しかし、北西海岸ネイティブの魚叩棒にも、動物図像など霊的な力を持つ神の姿が装飾されている。霊的な力を持つ絶対的な神は、この地域の魚類を支配する“主”として表現され、魚を獲得するときに助けてくれる“補助者”、“力”として解釈されていた。それを魚叩棒に形象している。魚叩棒に付随して儀礼性を帯びた要素が少ない分、口承文芸によってその観念的な世界が明らかになる。サケは人間の世界と対置される“サケの国”に住んでおりそこではサケは人間の姿をとる。サケの人々は魚叩棒で殴り殺されるとサケと化し、人間の糧となる。しかし、この死は終末的なものではなく、その亡骸を水中（“サケの国”）に戻すことによって、再び肉を纏い生き返る。この再生観に裏打ちされてサケの再生儀礼（初サケ儀礼）やタブーが、かなり高度に精緻化、様式化されているのである。

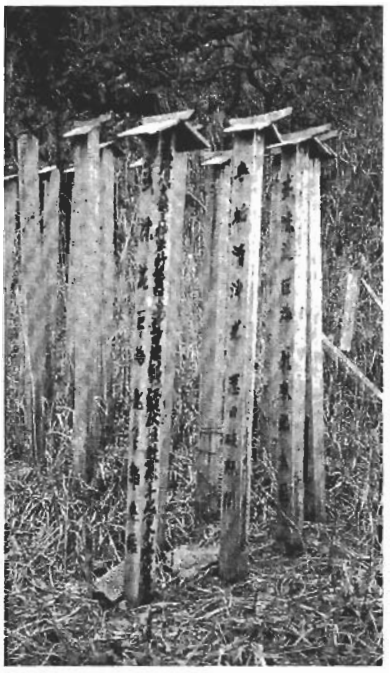
アイヌと北西海岸ネイティブには、根本的な部分でサケを支配する神観念の相違があり、また、それをめぐるサケの霊魂観、世界観の構成法に違いがある。それは、サケという限定的な課題のレベルではなく、それぞれの文化で卓越しそれぞれの人間生活を規定し支配するもっと大きな宗教、儀礼レベルの構造の違いに起因している。そのため、サケの死と再生のサイクルの表象される儀礼要素—魚叩棒や初サケ儀礼—にはその強弱のつけられ方に相違が見られるのである。ただし、サケをめぐる2分法的な世界を構成する思考や、サケの霊魂観に現れる霊魂の永遠不滅の思考、そして、それに背後で支えられる永遠回帰のサケの遡上（再生）に対する思考といったものは共通している。

日本本州の事例には、この両者に比べて果たしてどのような位置を与えられるのであろうか。本州において魚叩棒には、北西海岸ネイティブ以上に装飾的な儀礼要素を見いだすのは困難である。しかし、それに付随する呪言、名称、取り扱いの規定には、観念的な世界が濃厚に投影されていた。それはエビス神をめぐる伝承であり、多くの魚叩棒にエビス神と付会する伝承が付随していた。その機能から、人間の住む世界とは異なったサケの存在する別世界を措定することは可能である。この点については、アイヌ・北西海岸ネイティブの持つ2分法的な世界構成と共通しているといってよい。ただ、魚叩棒及びそれにまつわる伝承から読み解く限り、永遠不滅のサケの霊魂の存在、そしてサケの再生の観念といったものは明瞭ではない。そのような観念的な世界は儀礼、口承文芸を総合して検討せねばならない。

例えば、日本においてもアイヌ・北西海岸ネイティブと同じように、サケの肉体の換喩的表象である肉体の一部を、初サケ儀礼の時に川に流す事例が見られる。これは山形県庄内地方の事例で、そこでは漁期の最初に捕れたサケをオセンニンイヲと称し、肉を細かく刻み川へと流す[15]。また、事例13の新潟県山北町では、直接肉体の一部を流すことはないが、初サケ儀礼のサケの解体時に敷いておいた血の付いた藁を儀礼的に川に流す。このような儀礼要素に込められた心性として、アイヌ・北西海岸ネイティブと同様のサケの再生観を読みとることができる。また、本稿でも若干ふれたが、「サケの大助譚」などの口承文芸には、異界と此界を交流するサケの死と再生の循環論理、不滅の霊魂観が描かれている。これらの民俗事象を総合して考えると、日本においてもアイヌ・北西海岸ネイティブと類似したサケをめぐる観念的な世界を想起できうるのである[16]。

それぞれのサケをめぐる観念的な世界は、それぞれの文化の持つ儀礼・宗教の複合体に応じて構成される。日本では、日本文化に卓越したエビス信仰が、その複

写真21　新潟県山北町のサケの千本供養塔



合体をなす構成要素のひとつである。そして、仏教的な構成要素も無視することはできない（例えばサケの供養など）。そのような大きな信仰・儀礼体系を取り込みながら、あるは取り込まれながら基層的なサケの再生観、霊魂観といったものが再構成されてきたわけである。

謝　辞

本稿をまとめるにあたり、致道博物館犬塚幹士氏には資料提供等のご高配を賜った。末筆ながら深謝する次第である。

〔註〕

1）渡辺誠は、考古学・民具学的手法を用いて、ヨコヅチに関する用途の実態と形態差の歴史的背景について論述している（渡辺 1985：52-93）。それによるとヨコヅチには、1、ワラ打ち用、2、豆打ち用、3、楮打ち用、4、キヌタ用、5、綿打ち用、6、工具としての転用、7、首・形代としての転用という7つの用途があるが、発掘報告書などでは、出土事例のほとんどが十分な検討のなされぬままキヌタ用として扱われていることを批判している。そして、用途と形態差の相関を探るために、敲打部と柄部の境界が直角に近いもので、A、太くて短い形態、B、細くて長い形態、C、極端に細長い形態、敲打部と柄部の境界が斜めに傾斜するもので、D、太くて短い形態、E、細くて長い形態、F、敲打部先端にタガ状隆帯のみられるもの、G、敲打部と柄部の境界が不明確なものの7形態にヨコヅチを分類している。

この分類法では、日本本州に見られる大半の魚叩棒は、Gの敲打部と柄部の境界が不明確なものに分類される。この形態と用途の関係からいえば、Gの型は主用途としてキヌタ用であり、転用されることもほとんどない。しかし、日本の魚叩棒の場合、形態的にはこのキヌタに用いる型式のものと大差なく、そのため魚叩棒の出土例がキヌタ用として説明されている場合もあると考えられる。Gの型を始めとして、ヨコヅチは考古遺物として出土した場合、当然、出土状況などを鑑み、サケ漁など大型魚の生産と深く関わった地域、あるいは生産遺跡においては、魚叩棒としての可能性を検討することも必要であろう。

『北越雪譜』において紹介された魚叩棒は、渡辺の分類にしたがうとBの型式で、「敲打部と柄部の境界が直角に近いもので細くて長い形態」ということになる。この形態のヨコヅチは、主として豆打ちに用いられるが、工具として転用される例も見られる。渡辺は、この転用例として岩手県岩手郡雫石町の事例（雫石町立歴史民俗資料館所蔵）を紹介している。これは馬のひずめを切るための工具で、鉈とセットになって収蔵されている。『北越雪譜』では「魚楔といふもの馬の爪をきりたる楔にあらざれば死せず。私につくりたるつちにてはいくつ打ても升ず」（鈴木 1837：126）、つまりサケを殺すためにはウマの爪を切った槌を用いなければならない、という魚叩棒に関する規定が示されており、いみじくも民具の分類事例と一致す

る。このことから『北越雪譜』収載の「馬の爪をきりたる楔にあらざれば死せず」という言説は、工具としてのヨコヅチをさらに転用して魚叩棒として使用する過程で形成されたのかもしれない。何れにせよこの型式の魚叩棒例はそれほど多くない（山形県最上郡鮭川村松沢において犬塚幹士によって収集された事例24「イオタタキ」は、渡辺の分類ではAの型式になり、『北越雪譜』の事例と類似している。）

2）日本の民俗学の性格上、物質文化としての魚叩棒に対する関心は低い。そのため魚叩棒の大きさ、形態に関する情報はすこぶる少なく、それを取り巻く言語的な伝承の記録に重点が置かれている。したがって、アイヌ、及び北米北西海岸ネイティブの事例として提示したような形態、大きさによる分析は日本においてかなり困難な状況にある。

3）イクリアミ漁は船を用いる漁で、必ず2隻の船で行う、1隻に船を操るカジトリと網を操る者の2名が乗り込み、計4人で行う。2隻が平行等距離に並んで同じ速度で川下に船を流す。その船の間に網が張られ、下流から遡上してくるサケをすくい上げる。

4）致道博物館の「有形民俗文化財調査カード」による。この樹種の和名、学名は不詳。

5）本稿では、握り・打頭部の太さ、長さ、それと明確に打頭部が彫り削られているかどうかといった視点から、直棒型、ハンマー型、バット型に分類し、非ハンマー・バットの形式を有するものには分類名称を与えていない。資料的に正確な直径、全長が明示されているサンプルが少ないため、その分類は厳密なものではない。大まかに、打頭部の直径が握りに比べて大きく、打頭部の長さが全長の中で占める割合が少ないもの、あるいは打頭部を握り、柄と明らかに分けて太く削り残してあるものをハンマー型と称し、打頭部が握りに比べて太いがそれほどの差はなく連続しているものをバット型と称している。さらに、直径にほとんど差がないもの（おおむね10ミリ以内の直径差しかないもの）を直棒型としている。非ハンマー・バットの形式を有するものは、主に装飾が工夫されているものに多く、全体のシルエットがかなり複雑になっているが、日本本州ではこの型式を見ることはできない。

6）モンペアミは、袋網を複数連結したもので、上流部に網の口を開いて河中に設置する。上流部には柵を仕切っておき、これにサケの遡上が妨げられ川下に戻ったところでこの網に陥穽される。

7）アバは網の浮きである。純粋にサケの打頭用に製作され、使用された道具ではなく、浮きを魚叩棒に転用した事例である。

8）本書では『利根川図志』の成立年代を赤松宗旦の自序の記された安政2年（1855）としている。なお、柳田国男は、この書の解題で、刊行は安政5年（1858）の説を採っている（柳田 1938：3）

9）安斎忠雄は魚叩棒の多くに「刀の〝反り〟に似たゆるやかな曲線が見られる。この反りは鮭を叩く際、頭頂部に集中する棒の力が平らに当たることで一撃の効果を高めるとともに、ゆるやかな反りは、真直ぐな棒に比べて扱いに柔らかさがある」（安斎 1987：2）旨指摘している。魚叩棒に施される反りは、筆者の調査でも確かに実用的な目的で行われるようで、アイヌ・北西海岸ネイティブの事例に比して、日本本州の事例に多くこの工夫が施されているようである。なお本稿では魚叩棒に反りが入っていても、直径に差がなければ直棒型と表記しており、形態の分類にこの反りというファクターはあまり考慮していない。

10）握り・柄部にスギを用いた事例15、また、聞き書きの一般論として語られた事例37を含むと、スギ類を用いる魚叩棒は8例になる。

11）その他、事例13、23、37にもヤナギが使われる旨付記されており、これらを含むとヤナギ類を用いる魚叩棒は6例になる。筆者の調査、及び既存の調査報告からも、魚叩棒に関する材質制限を見いだすことは困難である。

12) 新潟県から山形・秋田県にかけて、サケの供養塔、及び供養卒塔婆が多く見られる。特に、山形県庄内地方にはサケの供養儀礼が卓越しており、月光川沿岸ではその支流ごとにサケの供養卒塔婆を立てて、サケの霊を供養している。サケを1000匹殺すと、人間を1人殺したのと同じになるとされ、供養塔は、1000匹の漁獲ごとにに立てられる千本供養塔が多い。また、月光川の流れる遊佐の天台宗永泉寺にはサケを引きつける不思議な力を持った石の伝説が伝えられている。

13) 呪言にエビス神は登場しないが、名称にエビス神の名が付せられていることからも、エビス神との関係性は密接といわざるを得ない。また、青森県八戸市の大祐神社は祭神として弁財天を祀っているが、同県上北郡野辺地町金沢にある大祐神社では、その祭神として蛭子神、すなわちエビス神を祀っている。この点から大島建彦は大祐神社とエビス信仰との関わりを示唆している（大島 1986：7)。

14) 日本のサケに関する伝承の中で最も良く知られているのが「サケの大助譚」である。これはサケの王とか主、あるいは化け物といわれる鮭が、毎年決まった日に川を上るという昔話で、山形県を中心に東北日本に広く分布している。以下、山形県最上郡最上町で採話された「サケの大助譚」の事例を紹介しよう。

「牛方や雑魚取りを生業にする築掛け八右衛門という男が五月節供の休みのために牛を洗っていると、大鷲が来て牛をさらっていく。八右衛門が仇をとろうと熊の皮を被って牛の真似をしていると、鷲が来て佐渡ケ島にある巣に連れていく。八右衛門は牛を殺した仇に、ヒナもろとも鷲を殺す。帰る方法を思案していると大魚が現れて事情を聞き、十月になったら親方の大助が最上川を遡るから頼めという。十月二十日のえびす講の日に鮭の大助を呼ぶと馬ほどある鮭が現れる。築掛け八右衛門と聞いて、怒って呑みこもうとするが、以後決して魚取りしないと約束して小国まで連れていってもらう。大助は「鮭の大助、今のぼる。鮭の大助、今のぼる」といいながら来る。この声を聞くと不吉な事があるために村人は餅搗きなどして騒いでいたが、八右衛門を見て驚く。以後、八右衛門は築掛けをやめ、村人も大助ののぼる日は、築の片方をあけておく。」(野村 1982：44)

以上の「サケの大助譚」には2つの世界が対置されていることがわかる。1つは主人公（人間）の生活する世界であり、もう1つは、離れ島という形で表現されるワシやサケの住んでいる世界である。この2つの世界は、人間にとっての此界と異界とに位置づけられている。この「サケの大助譚」語る逆転した世界は、通常の漁撈活動に現れる世界観を、神話的世界として逆説的に映し出している（菅 1990：125-146)。

15) 山形県庄内地方では、海や川で漁期のはじめに捕れたサケは、それを売り子が細かく切って各家を持って回り、オセンニンサマという信仰対象への喜捨を集めていた。サケの切り身は売り払うことなく、最終的に川に流される。この儀礼に用いられるサケをオセンニンイヲと称した(藤山？：？)。

16) 北太平洋縁辺（North Pacific Rim）という共通してサケ資源を有する地帯にアイヌ、北西海岸ネイティブ、日本本州北部は位置し、類似した環境のもとにその文化の類似性を指摘することは可能かもしれない。ただ、民俗学的な資料としては、錯綜する儀礼の複合体として既に再構成された結果を対象とするしかない。北太平洋縁辺の西南端に位置する地理的条件からいえば、日本において長い年月の間に様々な信仰・儀礼の束が絡まりあったのであり、ことさら北方文化との共通性ばかりを強調するわけにはいかない。一方で北方的な儀礼・信仰的な体系と共通するものを見いだすことができるし、また一方ではそれらと無縁の体系を導き出すことができる。魚叩棒、及び魚叩行

為は特殊な対象ではなく、日本の本州北部のおかれた信仰・儀礼の状況ある側面、断面を確実に表現しているのである。

追　補

前稿発表後、北海道立北方民族博物館齋藤玲子氏より、筆者が北西海岸ネイティブの魚叩棒として提示した事例25について、武器として製作されたものではないかというご指摘をいただいた。これはアンダーヒルによって「Salmon Clubs」として報告された3点で（Underhill 1945：26、前稿参照）、彼は、Nootka族の地方集団Makahの漁撈生活について記述する中でこれを掲載しており、Makahの使用した棒と筆者は推測する。いずれも所蔵者、全長・直径・材質が不詳。打頭部が太く、握りに近づくにしたがって細くなっている。握りはつかみやすいように細く整形されて、握りの後端部にはグリップエンドが残されている、いわゆるバット型である。他の北西海岸ネイティブの魚叩棒と異なり、装飾がグリップエンドに施されている特異性を、筆者は指摘した。

齋藤氏によると、北海道立北方民族博物館にNootka族が使用した鯨骨製の棍棒（「Whalebone Club」全長550ミリ、最大幅70ミリ、546グラム、柄にRaven（ワタリガラス）の意匠）があり、これが事例25に酷似しているという。また“Handbook of North American Indians” vol.7にも、War Club（戦闘時、リーダーの象徴として、また実質的な武器として用いられる棍棒）の一種として同様の鳥の意匠、型式を持った「Whalebone Club」が紹介されている（Arima and Dewhirst 1990:401)。そのような外貌の類似した事例と比較検討してみると、アンダーヒルが「Salmon Clubs」として提示した3点は、純粋に魚叩用として製作され、また使用されていたのか疑わしい。アンダーヒルの事実誤認か、あるいは武器の転用ということもあり得る。

ただし、転用については前稿でも述べたように、北西海岸ネイティブの魚叩棒で頻繁に見られた。北西海岸ネイティブの魚叩棒は、特にサケだけに用いられるのではなく、オヒョウなどの大型魚、アザラシ、ラッコなどの海獣類を撲殺するときなどにも流用されることが多い。また前々稿で筆者は、アイヌの魚叩棒が闘争用の棍棒から変化したという知里真志保の見解を取り上げ、魚叩棒の背景にある“打つ行為”の儀礼文化の重要性を指摘したが（菅1994：34-35)、これは北西海岸ネイティブでも同様であった。北西海岸ネイティブでは、戦闘用の武器として棍棒が使用されており、また儀礼的に奴隷を殺傷する道具としても棍棒が用いられた。例えば、ポトラッチの際に奴隷を殺したり、新築儀礼で奴隷を犠牲にする際には「Slave Killer」と呼ばれる特別な棍棒が使用される。その棍棒は形状、大きさ、材質など様々であるが、中にはアザラシや魚を叩く魚叩棒と非常によく似た、動物を表面に装飾彫刻した短い棍棒もあったという（Emmons 1991：338)。このエモンズの報告は、魚叩棒が戦闘用の棍棒から転用された、あるいは共通して使用されることもあった状況を明らかにする重要な資料である。これらの資料からもわかるように、アイヌ、北西海岸ネイティブの魚叩棒には、共通した“打つ行為”の儀礼的な文脈で考える余地が十分にあり、その点からいって、アンダーヒルの提示した「Salmon Clubs」が、実際に魚叩行為に使われた可能性を完全に否定することはできない。

なお、さらに齋藤氏には、筆者の見落としたNootka族の魚叩棒の事例をご教示いただいた。ここに事例26として追補する。

事例26　「Carved Wooden Salmon Club」Nootka族

デンバー博物館所蔵。全長600ミリ、直径・材質は不詳。打頭部の直径が握りに比べ若干大きいが、他の北西海岸ネイティブの魚叩棒に比べ、直径差が少ないといえる。握りの後端部にはグリップエンドが残されている。打頭部には、Nootka族の神話に現れる羽の生えた蛇とサンダーバードの犬が写実的な技法で彫り込まれている。1954年以前に収集されたもの。(Arima and Dewhirst 1990:396-397)

引用・参考文献

赤羽正春、1991：『越後荒川をめぐる民俗誌－鮭・水神・丸木舟－』（アペックス）
赤松宗旦、1855：『利根川図志』（なお本稿は、岩波文庫版（1938）によった。）
芦原修二、1984：『川魚図志』（崙書房）
安斎忠雄、1987：「鮭叩き棒考」『民具研究』69（日本民具学会）
伊藤栄来子、1974：「鮭漁聞書」『高志路』228（新潟県民俗学会）
　　1982：「早出川の鮭漁」『高志路』267（新潟県民俗学会）
犬塚幹士、1982：「最上川水系の鮭漁と用具」『民具マンスリー』15-5（神奈川大学日本常民文化研究所）
大島建彦、1986：「大祐神社の縁起」『西郊民俗』116（西郊民俗談話会）
小野寺正人、1980：「北上川における鮭漁の習俗－陸中日形四日市を中心として－」『東北民俗』14（東北民俗の会）
　　1983：『北上川の民俗文化』（ひたかみ）
　　1992：「陸前・気仙川の鮭漁と伝承」『北海道を探る』24（北海道みんぞく文化研究会）
　　1994：「鮭の漁撈習俗と伝説の成立」『日本民俗学』199（日本民俗学会）
川合勇太郎、1970：『ふるさとの伝説』（津軽書房）
菅　豊、1986：「漁撈民俗試論－儀礼としての漁撈活動について」『民俗学評論』26（大塚民俗学会）
　　1990：「鮭をめぐる民俗的世界－北方文化に見られる死と再生のモデル」『列島の文化史』7（日本エディタースクール出版部）
　　1992：「サケをめぐる宗教的世界－民間宗教者の儀礼生成に果たした役割についての一考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』40（国立歴史民俗博物館）
　　1994：「呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為（アイヌ編）」『動物考古学』3（動物考古学研究会）
　　1995：「呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為（北西海岸ネイティブ編）」『動物考古学』4（動物考古学研究会）
鈴木牧之、1837：『北越雪譜』（なお本稿は、岩波文庫版（1936）によった。）
田口松圃、1916：「鮭神とエビス」『郷土研究』4-8（郷土研究社）
波平恵美子、1978：「水死体をエビス神として祀る信仰：その意味と解釈」『民族学研究』42-4（日本民族学会）
野村純一、1979：「新話型瞥見－鮭の大助の周辺－」『日本昔話大成』12（角川書店）
　　1982：「鮭の大助」『日本伝説体系』3（みずうみ書房）
藤山豊、年不詳：『山形県漁業誌』（本書は、藤山による手書きの冊子で、山形県鶴岡市市立図書館に所蔵されている）
武藤鉄城、1940：『秋田郡邑魚譚』（アチックミューゼアム、なお本稿では復刻版（1990、無明舎出版）によった。）
柳田国男、1938：「解題」『利根川図志』（岩波書店）
山崎千束（柳田国男の筆名）、1916：「鮭と兄弟と」『郷土研究』4-7（郷土研究社）
吉田禎吾、1977：「よそ者・来訪者の観念」『講座・比較文化』6（研究社）
渡辺　誠、1985：「ヨコヅチの考古・民具学的研究」『考古学雑誌』70-3（日本考古学会）

追補の文献

Arima, Eugene and Dewhirst, John、1990：Nootkans of Vancouver Island. Handbook of North American Indians vol.7.
Emmons, George Thornton、1991：The Tlingit Indians. Douglas & McIntyre.
Underhill, Ruth、1945：Indians of the Pacific Northwest. United States Department of Interior.

（国立歴史民俗博物館民俗研究部・助手）

図3　事例2「なえづち」(新潟県魚野川流域、安斎1987：1より転載)

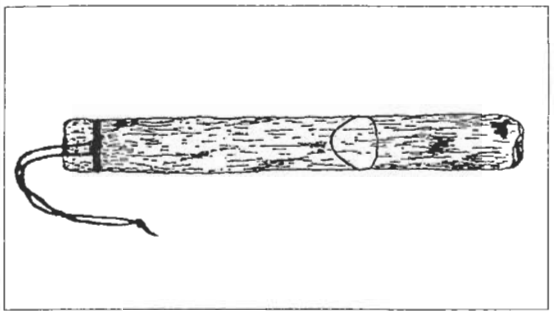


写真22　事例4「ナツチ」(新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田)

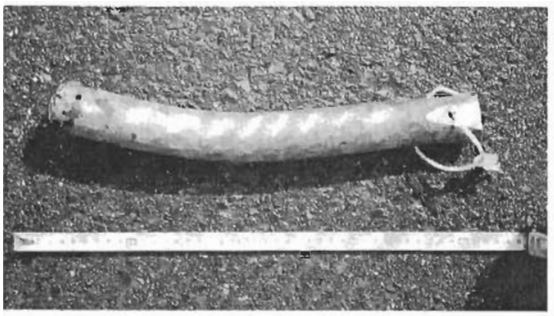


写真23　事例5「ナツチ」(新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田)

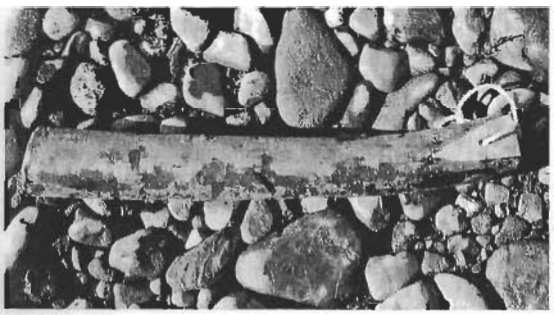


図4　事例8「のでぼう」(新潟県三面川流域、安斎1987：1より転載)

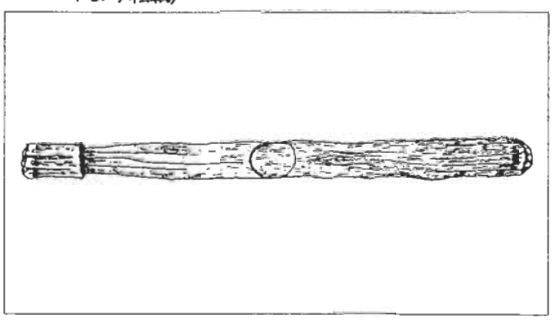


写真24　事例9「タタキボウ」(新潟県三面川流域、磐舟文華博物館所蔵)

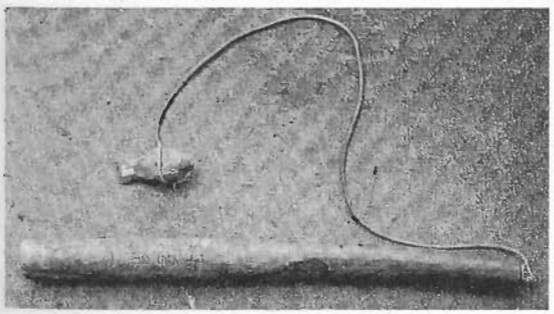


写真25　事例10(写真下)「タタキボウ」(新潟県村上市三面川流域、イヨボヤ会館(村上市内水面漁業資料館)所蔵)事例11(写真上)「タタキボウ」(新潟県村上市三面川流域、イヨボヤ会館(村上市内水面漁業資料館)所蔵)

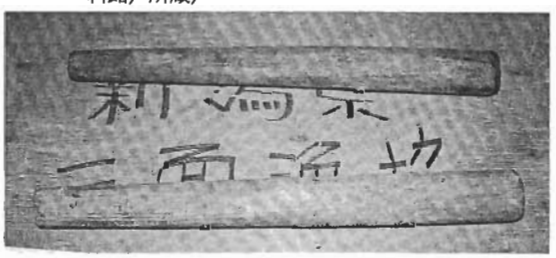


写真26　事例12「ナウチカギ」(新潟県岩船郡山北町府屋)

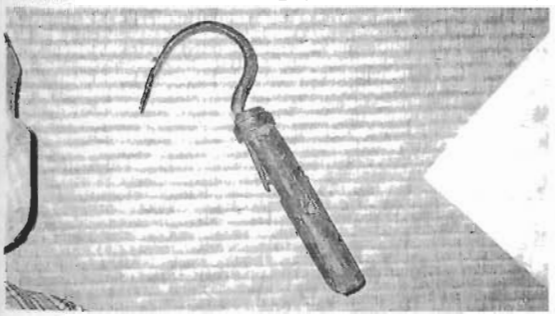


写真27　事例13「ナウチボウ」(新潟県岩船郡山北町大谷沢)

写真28　事例15「サケタタキボウ」（山形県東田川郡余目町槙島、（財）致道博物館所蔵）

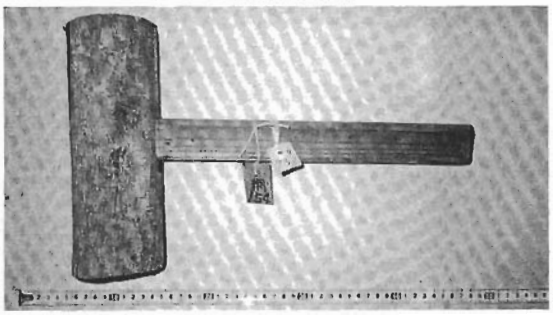


図5　事例16「こんぼう」（山形県日向川流域、安斎1987：1より転載）

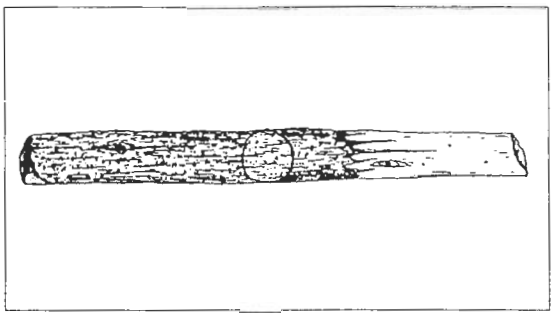


写真29　事例17「ボウ」（山形県飽海郡遊佐町前谷地、（財）致道博物館所蔵）

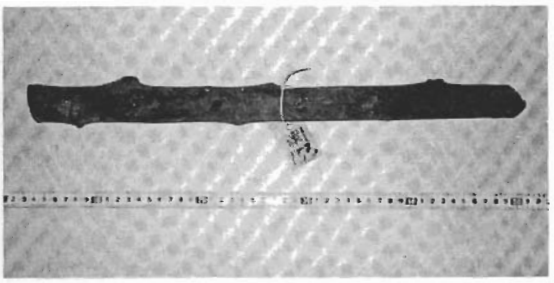


写真30　事例18「アンラクボウ」（山形県飽海郡遊佐町箕輪）

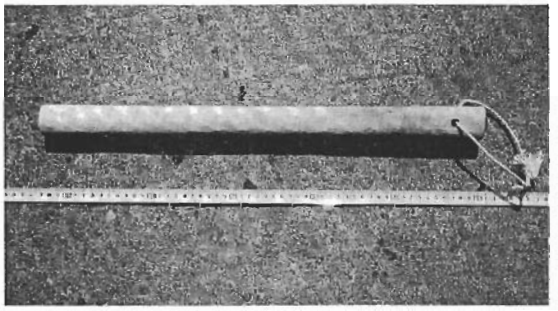


写真31　事例19「アンラクボウ」（山形県飽海郡遊佐町箕輪）

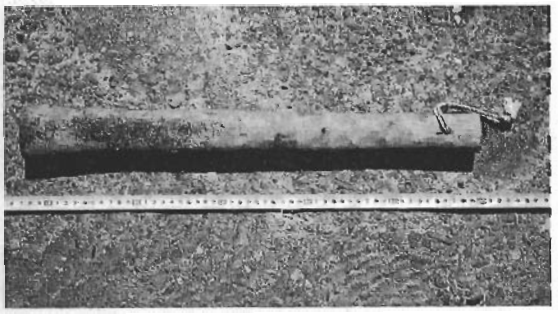


写真32　事例20「アンラクボウ」（山形県飽海郡遊佐町箕輪）

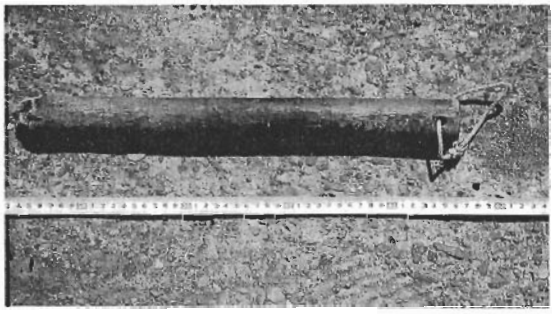


写真33　事例21「エビスボウ」（山形県最上郡大蔵村清水、（財）致道博物館所蔵）

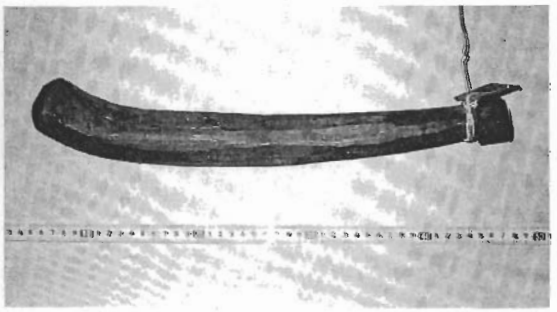


写真34　事例22「エベス」（山形県最上郡舟形町堀内、舟形町歴史民俗資料館所蔵）

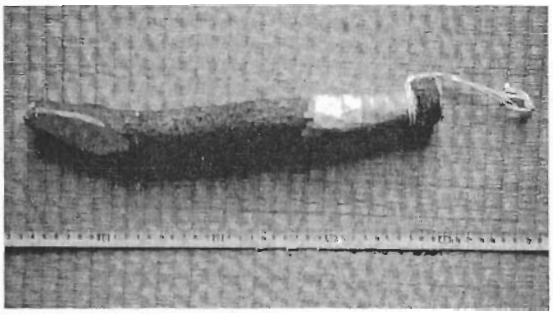


写真35　事例23「エビスボウ」（山形県最上郡舟形町舟形）

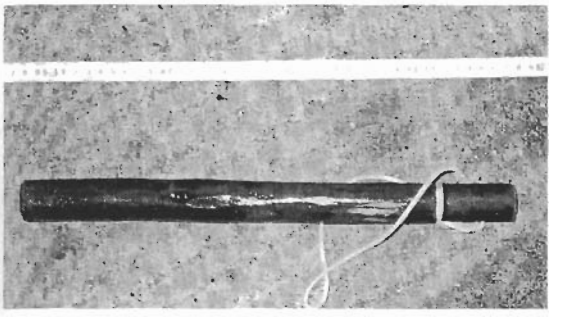


写真36　事例24「イオタタキ」（山形県最上郡鮭川村松沢、（財）致道博物館所蔵）

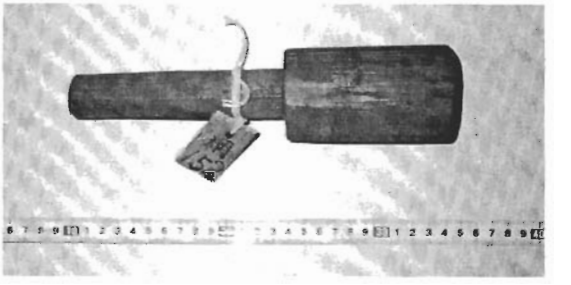


写真37　事例25「タタキボウ」（山形県最上郡鮭川村川口）

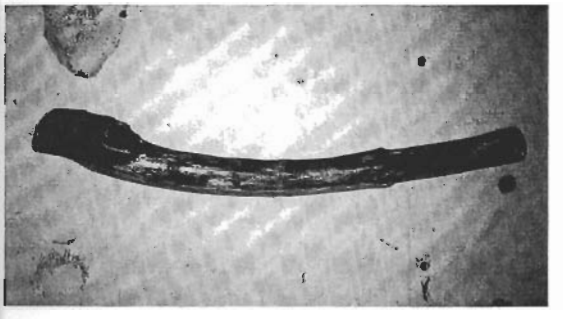


写真38　事例26「タタキボウ」（山形県最上郡真室川町高沢）

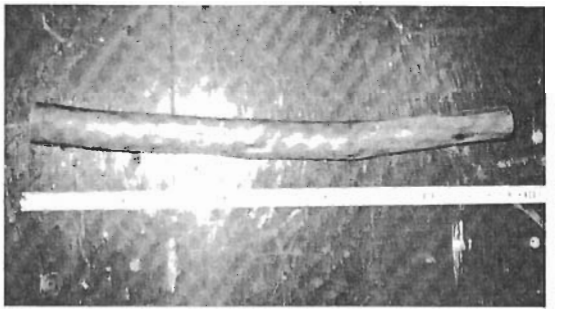


写真39　事例35「ゲンコ」（岩手県宮古市津軽石）

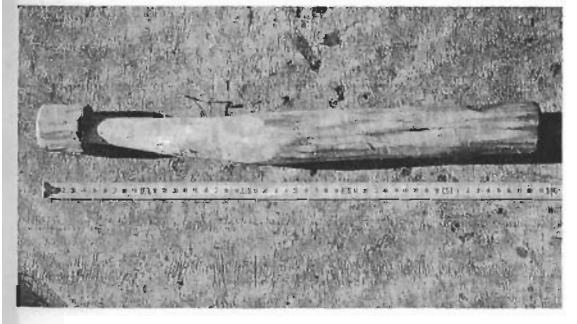


写真40　事例39「ウオコロシ」（茨城県東茨城郡常北町上泉表坪）

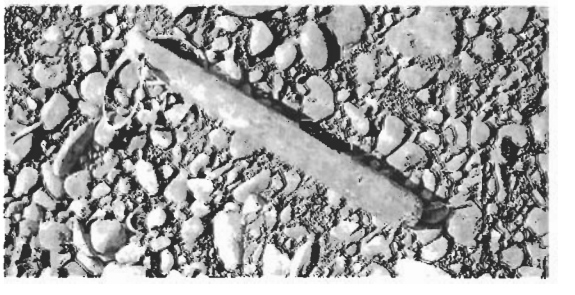


表1　魚叩棒一覧表

番号	名称	使用地(使用するネイティブ)	全長	径	材質	形態	所蔵	備考
	日本本州の魚叩棒							
1	魚撲（なつち）	新潟県魚野川流域				ハンマー型		「馬の爪きりたる桜」、（鈴木　1937）
2	なえづち	新潟県魚野川流域	280	31~33	キリ類	直棒型		（安斎：1987）
3	ナヅチ（魚槌）	新潟県南魚沼郡大和町浦佐	364	30				「オーベスサマ、オーベスサマ」の呪言、（伊藤：1974）
4	ナヅチ	新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田	366	39~43	ヤナギ類	直棒型		「オエビスサマ」「オービスサマ」の呪言
5	ナヅチ	新潟県北魚沼郡小出町伊勢島新田	353	39~41	ヤナギ類	直棒型		「オエビスサマ」「オービスサマ」の呪言
6	ナジリ棒	新潟県五泉市三本木						「ホエバシ、ホエバシ」の呪言、（伊藤：1982）
7	ノチ棒・ノジ棒	新潟県荒川流域						（赤羽：1991）
8	のでぼう	新潟県三面川流域	360	18~30		バット型		（安斎：1987）
9	タタキボウ	新潟県三面川流域	410	30~32		直棒型	弊舟文華博物館	「万物輪廻　一殺多生」の線刻
10	タタキボウ	新潟県三面川流域	410	32~45		バット型	イヨボヤ会館	
11	タタキボウ	新潟県三面川流域	360	30~43		バット型	イヨボヤ会館	
12	ナウチカギ	新潟県岩船郡山北町府屋	255	33~34	スギ類	直棒型		「オエビス、オエビス、オエビス」の呪言
13	ナウチボウ	新潟県岩船郡山北町大谷沢	408	41~63	スギ類	バット型		「御幣」の形
14	ナヅチ・エビス棒	山形県最上川河口域						「このエビス」「トウエビス」の呪言、（野村：1979）
15	サケタタキボウ	山形県東田川郡余目町撰島	502	38~39	キリ類	ハンマー型	致道博物館	
16	こんぼう	山形県日向川流域	350	30~37	ナヤギ類	直棒型		（安斎：1987）
17	ボウ	山形県飽海郡遊佐町前谷地	458	40~45	ギシヤの木？	直棒型	致道博物館	
18	アンラクボウ	山形県飽海郡遊佐町箕輪	533	37~33	ナラ類	直棒型		
19	アンラクボウ	山形県飽海郡遊佐町箕輪	524	42~60	ナラ類	バット型		
20	アンラクボウ	山形県飽海郡遊佐町箕輪	425	42~43	ナラ類	直棒型		
21	エビスボウ	山形県最上郡大蔵村清水	397	35~53	スギ類	バット型	致道博物館	「エビス」の呪言、（大塚：1982）
22	エベス	山形県最上郡舟形町堀内	350	30~44	ヤマクワ	バット型	舟形町歴史民俗資料館	「オエビス、オエビス」の呪言
23	エビスボウ	山形県最上郡舟形町舟形	390	33~35	スギ類	直棒型		「エビスサマ」のご神体
24	イオタタキ	山形県最上郡鮭川村松沢	239	27~60	ナラ類	ハンマー型	致道博物館	
25	タタキボウ	山形県最上郡鮭川村川口	495	33~55		バット型		
26	タタキボウ	山形県最上郡真室川町高沢	465	29~39	スギ類	バット型		
27	名称不詳	秋田県仙北郡上檜木内村（現西木村）						「エビス！」の呪言、（武藤：1940）
28	名称不詳	秋田県仙北郡田沢村（田沢湖村）						「エビス！」の呪言、（武藤：1940）
29	名称不詳	秋田県仙北郡雲沢村碇（現角館町）						「エビス！エビス！」の呪言、（武藤：1940）
30	名称不詳	秋田県仙北郡雲沢村下邑（現角館町）						「エビス！」の呪言、（武藤：1940）
31	名称不詳	秋田県仙北郡花館村（現大曲市）						「エビスッ」の呪言、（田口：1916）
32	アバ	秋田県仙北郡花館村（現大曲市）						「今日の初鮭一万五千本此のハチ夫恵比寿夫恵比寿」の呪言、（武藤：1940）
33	アバ	秋田県河辺郡豊岩村（現秋田市）						「このエビス！」「トウ恵比寿」「トウ西の宮大神宮」の呪言、（武藤：1940）
34	恵比須槌	青森県三戸郡湊村（現八戸市）						「千魚又次郎八百長者」の呪言、（山崎（柳田）：1916）
35	ゲンコ	岩手県宮古市津軽石	482	24~48	スギ類	バット型		
36	タタキボウ・センボウ	岩手県気仙川流域	406					（小野寺：1994）
37	センボンキネ他	岩手県・宮城県北上川流域	456					（小野寺：1992）
38	ヘンゴヅツ・ノジボウ	岩手県・宮城県北上川流域						（小野寺：1993）
39	ウオコロシ	茨城県東茨城郡常北町上泉表坪	361	32~48	カシ類	バット型		
40	不詳	千葉県、茨城県利根川流域				直棒型？		（赤松：1855）
41	スリコギ	茨城県北相馬郡利根町押付新田						（芦原：1984）

表2　魚叩棒一覧表

番号	名称	使用地(使用するネイティブ)	全長	径	材質	形態	所蔵	備考
	アイヌの魚叩棒							
1	魚たたき棒（イサパキクニ）	北海道苫小牧市	460	32			苫小牧市博物館	（苫小牧市博物館：1986）
2	なづち棒	北海道釧路市	471			バット型	釧路市立博物館	「木幣の一種」、（釧路市立博物館：1989）
3	鮭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）	北海道旭川地方	360	30～40	ヤナギ類	直棒型	市立旭川郷土博物館	（北海道教育庁振興部文化課：1977）
4	鮭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）	北海道旭川地方	360	33	ヤナギ類	直棒型	市立旭川郷土博物館	（北海道教育庁振興部文化課：1977）
5	鮭の頭たたき棒(イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)	北海道旭川地方	370	30	ミズキ類	直棒型	市立旭川郷土博物館	（北海道教育庁振興部文化課：1977）
6	頭たたき棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）	北海道沙流郡平取町二風谷	425	30	ヤナギ類	直棒型	二風谷アイヌ文化資料館	（北海道教育庁振興部文化課：1977）
7	なづち棒（イサパキクニ、i-sapa-kik-ni）	北海道白老郡白老町	452	31	ヤナギ類	直棒型	白老民俗資料館	（北海道教育庁社会教育部文化課：1979）
8	叩き棒(イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)	北海道浦河郡浦河町	325	35	ヤナギ類	直棒型	浦河町郷土博物館	（北海道教育庁社会教育部文化課：1989）
9	叩き棒(イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)	北海道浦河郡浦河町	260	20	ヤナギ類	バット型	浦河町郷土博物館	（北海道教育庁社会教育部文化課：1989）
10	叩き棒(イサパキクニ、i-sapa-kik-ni)	北海道浦河郡浦河町	260	30	ヤナギ類	直棒型	浦河町郷土博物館	（北海道教育庁社会教育部文化課：1989）
11	なづち棒（イサパキクラ、isapakikni）	北海道苫小牧市	348	23		直棒型	苫小牧青少年センター	（北海道教育庁社会教育部文化課：1981）
12	魚打ち棒	北海道阿寒郡鶴居村	405	35			北海道立北海道開拓記念館	（北海道開拓記念館：1981）
13	魚打ち棒	北海道江別市	427	30			北海道立北海道開拓記念館	（北海道開拓記念館：1981）
14	魚打ち棒	北海道恵庭市	410	38			北海道立北海道開拓記念館	（北海道開拓記念館：1981）
15	魚打ち棒	北海道恵庭市	358	34			北海道立北海道開拓記念館	（北海道開拓記念館：1981）
16	なずち棒（isapakikni）		367		ヤナギ類	直棒型	河野本道	（北海道開拓記念館：1972）
17	なずち棒（isapakikni）	北海道旭川市近文	355		ヤナギ類	直棒型	河野本道	（北海道開拓記念館：1972）
18	Stick（魚打棒）		541				ブルックリン美術館	Culinによる収集（小谷：1993）
19	頭叩棒（イサパキクニ）	北海道川上郡弟子屈町鐺釜路				直棒型		（更科：1976）
20	頭叩棒（イサパキクニ）	北海道旭川市近文				直棒型		（更科：1976）
	北西海岸ネイティブの魚叩棒							
1	Wooden Club	Tlingit族					デンバー美術博物館	トドの形象（Hola：1965）
2	Fish Club, Club	Tlingit族	559	35～63	イエロー・シダー		ワシントン州立博物館	クジラの形象（Inverarlty：1950、Stewart：1977）
3	Killer Whale Fish Club	Tlingit族					国立自然史博物館	シャチの形象（Fitzhugh and Cremell：1988）
4	Club	Tlingit族	390				プリミティブ・アート博物館	人像（Stewart：1977）
5	Fishing Club	Haida族						魚類かクジラの形象（Drew：1982）
6	Club	Haida族	400			ハンマー型		人面（Stewart：1977）
7	Club	Haida族	350				アメリカ自然史博物館	鳥類（ワシ？）の形象（Stewart：1977）
8	Club	Haida族	370				アメリカ自然史博物館	人面（Stewart：1977）
9	Halibut Fish Club	Tsimshian族	400	50			北海道立北方民族博物館	トドの形象
10	Sea Lion Fish Club	Tsimshian族	400	50			北海道立北方民族博物館	トドの形象
11	Club	Tsimshian族	410	45			北海道立北方民族博物館	鳥類（ワシ？）の形象
12	Seal Club	Kwakiutl族					ネイティブ伝統文化センター	アザラシの形象
13	Fish Club	Kwakiutl族	406			ハンマー型	ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館	人面（Bawthorn：1979）
14	殺魚棒	Kwakiutl族				ハンマー型	国立民族学博物館	
15	殺魚棒	Kwakiutl族	470				国立民族学博物館	ネズミザメの形象
16	Club	Kwakiutl族	450				ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館	人像（Stewart：1977）
17	Club	Kwakiutl族	345		イチイ類	ハンマー型	国立人類学博物館	丸い石をつかんだ拳を形象（Stewart：1977）
18	Club	Kwakiutl族	350			ハンマー型	アメリカ自然博物館	（Stewart：1977）
19	Club	Kwakiutl族	350			ハンマー型	アメリカ自然博物館	（Stewart：1977）
20	Fish Killing Club	Nootka族	394	74		ハンマー型	国立民族博物館	
21	Club	Nootka族	360			ハンマー型	ワシントン州立博物館	（Stewart：1977）
22	Sturgeon Club	Coast Salish族	415			バット型	ブリティッシュ・コロンビア州立博物館	（Stewart：1977）
23	Club	Coast Salish族	400			ハンマー型		（Stewart：1977）
24	Fish Club		450	50		ハンマー型	北海道立北方民族博物館	アザラシとクジラを合成して形象
25	Salmon Club	Nootka族？				バット型		（Underhill：1945）
26	Carved Wooden Salmon Club	Nootka族	600				デンバー博物館	羽の生えた蛇とサンダーバードの犬（Arima and Dewhirst:1990）、追加事例

"Fishhead-Striking-Club" as a Magical Implements, and "Fishhead-striking" as a Magic (The 3rd volume:Honshu in Japan)

Yutaka, Suga

In North Pacific Rim, the native peoples, the great bicontinenntal arc that circumscribes the nothern reaches of the Pacific Ocean, occupy one of the richest maritime environments (include river and lake) in the world. Its varied resourses include many species of fish. The sea and river exert a strong unifying influence on the cultures of the region.

Because the fish(especially "salmon") of the river and sea were life itself to the native peoples of the North Pacific Rim, customs and taboos arose to regulate the activities connected with fish and fishing. Because the salmon were, for the majority of the cultures of the region, the most important of all the fish, there were more beliefs and customs about salmon than about any other fish. These beliefs regulated the attitude of caring for the fish, and reverence for their role in life.

In the Tohoku district (Honshu in Japan), the salmon fishermen always had a thick wood club by their side, which was called "Ebisu-club", and with this they killed their catch. They did so by knocking it on its head while saying them prayers that "Ebusu!Ebisu!Ebisu!". The salmon fishermen in the Tohoku district believed that salmon wanted to be offered fishermen to Ebisu -gami(Ebisu-gami is a God or spirit,and in japanese folk belief Ebisu-gami is worshipped as a luck-bringing deity by fishermen)

In this paper, the author examines basic form, design, and how to use of fishhead-striking-club, points out that fishhead-striking-club is a magical implements, and striking on salmon's head is a magical activity.